

Network 経済

2017
Vol.31・32

インタビュー

経済学部生の辿った道
～これまで、今、そしてこれから



獨協大学経済学部

インタビュー

経済学部生の辿った道 ～これまで、今、そしてこれから

03 巻頭言

経済学科長 市原 博

インタビュー 経済学部生の辿った道～これまで、今、そしてこれから

04 インタビュー記事 企画意図

05 2年生代表

国際環境経済学科 内倉ゼミ 山田 拓海

06 3年生代表

経営学科 有吉ゼミ 関根 優子

07 4年生代表

国際環境経済学科 木原ゼミ 川津 真梨奈

08 20歳代表

株式会社三越伊勢丹
2013年経営学科卒 有吉ゼミ 赤石 奈緒 様

10 30歳代表

NHK 富山放送局アナウンサー
2008年経営学科卒 2010年経済学研究科修了 岡村ゼミ 三平 泰丈 様

12 40歳代表

衆議院議員
1996年経済学科卒 松本ゼミ 田畑 裕明 様

14 50歳以上代表

株式会社ニュー・オータニ 代表取締役常務 ホテルニューオータニ 総支配人
1979年経済学科卒 松岡ゼミ 清水 肇 様

15 第4回プレゼンテーション・コンテスト開催報告

16 第4回プレゼンテーション・コンテスト実施報告チーム別詳報

25 ゼミ活動報告

40 学生活動報告

42 退職教員挨拶

45 新任教員挨拶

46 新任職員挨拶

47 専任教員2016年度業績一覧

51 編集後記

経済学部をめざすもの

経済学部は、1964年の開学時に経済学科のみで開設され、1966年に経営学科、2013年に国際環境経済学科を新設して、今日ではこれらの3学科から構成されています。「語学の獨協」の強みを生かして、各学科とも充実した英語教育を提供するとともに、経済学科は、経済学の学習を通して、日本や世界の経済・社会問題を分析・理解し、その解決策を提案できる力を育成すること、経営学科は、情報処理能力を含めて実践的な教育を行いビジネスの現場で活躍できる力を養成することを目標にしています。国際環境経済学科は、今日のグローバル社会において重要な課題となっている環境と開発を両立させ、持続可能な社会を実現するのに貢献できる人材の育成を目指しています。

それぞれの学科は、独自の教育目標を持ち、それを実現できる充実した教育内容を用意していますが、同時に、学生の興味・関心を大事にして、学科の壁を越えて幅広く勉強できるようにしているのも、経済学部の特長の一つです。経済学科に所属して経済学を中心に学びながら、経営学科の授業を履修してビジネスに関する知識を身につけ、さらに、国際環境経済学科の授業やイベントに参加して、グローバルに活躍できる力を強化するといった学び方も可能です。経済学科の学生の例で説明しましたが、それは経営学科、国際環境経済学科の学生も同様です。

「オールインキャンパス」という言葉に象徴されるように、草加市の落ち着いたキャンパスの中で、経済学部だけでなく、他学部の教員の授業も「全学共通カリキュラム」で学ぶことができるのも、経済学部の魅力のひとつです。

同時に、キャンパスの中に止まらず、大学の外に出て、外部の人々と積極的に交流する中で学ぶ機会がたくさんあるのも経済学部の教育の特長です。その中心になっているのが、演習(ゼミナール)です。一人の教員に20名程度の学生がついて、その教員の専門分野の学問を研究する演習は、経済学部では2年から4年まで必修で、全員が履修することになっています。多くの演習で、その活動が学外に広がっています。合同研究会やディベートで他大学の学生と交流する演習は多数ありますし、企業と連携してその戦略プランの作成に取り組む演習、地域に出て行って、そこで生じている問題の解決に取り組む中で地域の人々と交流する演習、地域の人々と協力して地域の環境問題の解決策を探究する演習、さらには、開発途上国に出かけて、抱えている問題を調査し、その解決策を企画する演習などもあり、多くの演習が積極的な活動に取り組んでいます。

これらの教育を通して経済学部が目指しているのは、学生のみなさんが自立した社会人として社会のいろいろな分野で活躍し、充実した人生を歩んでいける能力を身につけることです。イギリスのEU離脱やトランプ米大統領の実現に象徴されるように、グローバリズムと反グローバリズムの衝突・葛藤が激化し、世界が不安定化することが危惧されています。その中でも、人口が減少し、経済が縮小していくことが確実な日本に生きることになる若い人たちには、日本経済の成長に寄りかかって生きて来ることができた私たち中高年世代とは違い、変化の激しいグローバル社会の中で自立して人生を切り拓くことのできる力が必要です。私たち経済学部の教職員は、皆さんたちのそうした成長のお手伝いができることを願っています。



経済学科長 市原 博

経済学部生の辿った道

～これまで、今、そしてこれから

経済学部経営学科教授 有吉 秀樹

建学から半世紀を経た経済学部。「大学は学問を通じての人間形成の場である」という理念のもと、これまでに数多くの卒業生を輩出してきました。学び舎を巣立っていったかつての学生たちは当時何を考え、どう生きていたのでしょうか？そして、経済学部で得たものは彼ら彼女らの人生をどのように色付けしたのでしょうか？6名の学生インタビューの手によって、諸先輩たちの往時を振り返りながらの人生の棚卸が始まります…。

一方、学び舎に集う現代の学生たちは今何を思い、どう動いているのでしょうか？そして、経済学部での学びを通して彼ら彼女らはどんな未来を見つめているのでしょうか？若人たちの夢と希望に満ちた声を学内で拾ってきました…。

インタビュー

経営学科4年 有吉ゼミ ^{わしみ} 鷲見 ^{ちはる} 千春

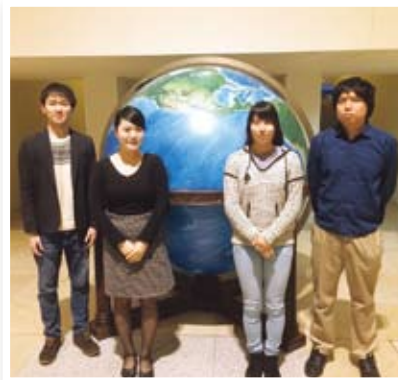
経営学科3年 有吉ゼミ ^{せきね} 関根 ^{ゆうこ} 優子

経営学科3年 徳永ゼミ ^{ふくしま} 福島 ^{あきら} 諒良

経営学科3年 徳永ゼミ ^{はぎわら} 荻原 ^{わこ} 和琴

国際環境経済学科3年 山崎ゼミ ^{うきみ} 宇佐見 ^{まお} 真央

経済学科3年 山崎ゼミ ^{おおつか} 大塚 ^{こうた} 浩太



インタビュー

2年生代表

国際環境経済学科 内倉ゼミ ^{やまだ} 山田 ^{たくみ} 拓海

3年生代表

経営学科 有吉ゼミ ^{せきね} 関根 ^{ゆうこ} 優子

4年生代表

国際環境経済学科 木原ゼミ ^{かわつ} 川津 ^{まりな} 真梨奈

20歳代表

株式会社三越伊勢丹 2013年経営学科卒 有吉ゼミ ^{あかいし} 赤石 ^{なお} 奈緒 様

30歳代表

NHK 富山放送局アナウンサー 2008年経営学科卒 2010年経済学研究科修了 岡村ゼミ ^{みひら} 三平 ^{やすたけ} 泰丈 様

40歳代表

衆議院議員 1996年経済学科卒 松本ゼミ ^{たばた} 田畑 ^{ひろあき} 裕明 様

50歳以上代表

株式会社ニュー・オータニ 代表取締役常務 ホテルニューオータニ 総支配人 1979年経済学科卒 松岡ゼミ ^{しみず} 清水 ^{はじめ} 肇 様

2年生代表

将来に向けての準備期間

国際環境経済学科 内倉ゼミ やまだ山田 たくみ拓海

興味をもった事を大切に

高校生の時から漠然と海外で仕事をしたいという思いがあり、国際系の学部を選択肢の一つとして考えていました。そんな時、NHKの“プロフェッショナル 仕事の流儀”「ナニワの軍師、再起のテーマパーク マーケター・森岡毅」(第237回、2014年9月1日放送)を見た際に大変感動し、自分の能力で人を助けるマーケターの仕事に魅かれました。マーケティングについて学べる経済学部と海外のことについて学べる国際に焦点を当てた学科から、獨協大学の経済学部国際環境経済学科を選択しました。

プロフェッショナルとして活躍できるようになりたい

大学入学初日に貰ったパンフレットの中に公認会計士養成講座を見つけました。今まで簿記を勉強した経験もなく、公認会計士がどのような職種なのか知識がありませんでした。ガイダンスへ参加した際、電卓を叩くことだけでなく様々な業務があることを知り、その中でもプロフェッショナルとして企業と関わるコンサルティングの仕事に興味を持ちました。

コンサルティングの仕事は誰もができる仕事ではなく、勉強をして資格を得ることで自分の力を人の役に立たせることができます。さらに、コンサルティングの仕事を通して、海外の人とも関わるのができたら、将来のやりたい姿に近づけると感じました。以上の思いから、公認会計士養成講座を受講することに決めました。

実践的に英語を使えるようになるために

英語の必要性を実感していたことから、ESS(注1)に関心を持ちました。見学に行った際、理論的に英語で人を説得させる能力は、実際に取り組むことで身に付くものだと感じました。3年間英語の授業と部活に取り組むことで、少しでも会話できるようになるのではと考えESSへの入部を決めました。

この部活は英語を学ぶだけでなく、選挙や大会の運営、会則などがあります。部活として組織がしっかりしており、OBOG、先輩方との縦のつながりが強く、みなさんの努力している姿を見て刺激を受けています。

部活を通して、苦手としていた理論的に文章を読み書きすることや、コミュニケーション能力が身に付いたと感じています。

(注1)ESS:English Speaking Societyの略称。学校における英会話を中心とした部活動。

自身の目標に向けて

勉強と部活と、毎日が忙しいです。今、取り組んでいることが目指していたものと合っているのだろうかや疑問に思うこともあります。入学前、大学生はバイトや遊ぶことが中心というイメージがあり、実際に流されそうになったこともありましたが、しかし、今、置かれている環境

は真面目な人が多く、刺激を受けながら自身の目標に向けて頑張っています。

今後、大学生活では公認会計士に向けての勉強と共に、部活動も積極的に取り組み、他大学も出場するスピーチ大会に出て結果を残したいと考えています。

将来の展望

日本の多くの中小企業が不況の中で苦しんでいると聞いています。コンサルティングの道に進み、少しでも状況を改善するための手助けができるようになりたいと考えています。

高校生へのメッセージ

受験勉強や受験の経験が将来どのように役に立つのか、私も正直まだわかりません。しかし、妥協することなく目標の学校に向かって頑張りたいと思います。大学受験は成功失敗に関わらず、自分にきっかけを与えてくれる機会だと思います。

インタビューより

簿記検定2級にも合格し、公認会計士に向けての道を着実に歩んでいる山田君にお話を伺いました。勉強に部活動に、と将来のやりたい姿に向けて努力される姿は生き生きとしており、インタビューをする側も大変刺激を受けました。(鷺見)

高い目標を持ち、自分がどうしたら成長できるかを常に考えながら大学生活を送る山田君の姿は私も見習わなくてはいけないと思いました。これからも夢に向かって勉強や部活動を頑張りたいです。(福島)



3年生代表

「いまの自分」ができることを

経営学科 有吉ゼミ せきね 関根 ゆうこ 優子

有吉ゼミナルとの出会い

今では獨協大学で充実した大学生活を送っていますが、実は第一志望の大学は獨協大学ではありませんでした。志望校不合格…大学受験に失敗した過去を持っています。大学1年生時は再受験を試みようか毎日悩んでいました。

転機が訪れたのはその年の秋、ゼミの説明会。「今ある環境の中でベストを尽くさなければいけないのではないか。」企業向けの資格支援を行う会社を経営している父の影響もあって、マネジメントに興味があった私は有吉ゼミを選択しました。有吉ゼミはマネジメントを主に研究しており、ほぼ毎日皆で集まって課題について話し合いを行い、個々でも図書館で朝から夜遅くまで課題に対する研究・調査を怠らず、無我夢中で活動に取り組んでいます。「ゼミの活動は1人ではできません。しかし周りに高め合っていく同期、先輩、先生がいるからこそ毎日辛くても課題を乗り越えていける」そんな私がゼミに入って変わったこと。ゼミに入る前までは何か新しいことを始めた際に「忙しいから」と自分自身に言い訳をして途中で投げ出してしまうことが多々ありました。しかし、最近はゴール(目標)を定め「なんのために始め、そして行動しているのか」を考えることで、途中であきらめることなく取り組めるようになりました。私にとってゼミ活動は自身を変えた大きな存在となっています。



いま学んでいること…そして将来へ

ゼミで住宅購入や介護の消費者心理を分析する中で、性別、国籍、年齢などカテゴリーに捉われ過ぎずに、消費者心理を丹念に分析する楽しさを知ってから、「社会心理学」について興味を持ち始めました。人間とその人間を取り巻く環境(社会)、その相互関係の中で自己の価値観が形成されていく面白さに惹かれました。

将来については大学院進学、就職の両方の可能性を考えています。残りの大学生活の中で、大学院に進学するならば、研究テーマについてもっと深く考えていきたいです。また、就職するのであれば様々な方とコミュニケーションをとることができる営業職に就きたいです。この2つの選択に向き合いつつ、授業は勿論、インターンシップや自主企画の立案などを視野に残りの大学生活も充実したものにしたいです。

在校生、高校生へのメッセージ

大変な時、いかに弱い自身と向き合い、受け入れるかがその後の人生に大きく関わると思います。10年、20年経っても、過去の自分のことを笑って話せるくらい「今」の自分に自信を持っていたいですね。

インタビューより

お話を聞いていく中で、明確なビジョンを持って物事を考えている方という印象を受けました。ゴールに到達するために努力を怠らないこと、そしてゴールに向かうための正しい方法を持つ眼は関根さんもお話していたようにゼミ活動で得た能力だと思います。大学進学をして、進学前まで描いていた将来の自分に近づこうと、努力し続けられる人はどれだけいるのでしょうか。関根さんにとってゼミはその支えになっているのだと思います。どんな環境でもベストを尽くそうと走り続けている関根さんをとても眩しく感じました。(萩原)

関根さんはおっとりとした第一印象とは違い、思いついた事をすぐに実行に移すアクティブな方でした。目標に向かって一直線の姿勢は自分の大学生活との良い比較になりました。見習わなくてはいけないなと思いました。(宇佐見)

4年生代表

何事にも「Try」が成長の種に

国際環境経済学科 木原ゼミ かわつ川津 まりな真梨奈

英語が話せるのは当たり前、社会問題を体系的に学びたい

高校生の時から貧困問題をはじめとした紛争、テロなど日本のみならず社会に巻き起こる様々な問題に興味を持っていました。英語が話せるのは当たり前、より一層社会問題にも目をむけて、体系的に考え方を学びたい、という思いから獨協大学経済学部国際環境経済学科の入学を決めました。最初は数学が苦手な経済に興味がありませんでした。しかし開発経済学の授業で経済の視点から貧困問題を捉えるということを知り、貧困問題の奥深さを認識することで経済学の楽しさを実感しました。

頼れるお姉さんの存在

1年次に、創立されたばかりの国際環境経済学科を広めたいとの思いから学生スタッフの団体CLOVERに所属、近隣住民との交流やオープンキャンパスのスタッフとして活動してきました。オープンキャンパスで、出会った勉強の方法に悩む高校生に「何でも聞いてね」と積極的に声をかけ、できるだけ親身になって相談にのるように努めるなど、頼りになる性格から、「お母さん」と周りに呼ばれることもしばしば。

学べる環境を存分に使いたい

1年次から4年間オープンキャンパススタッフを担ってきて感じた獨協大学の良さは、進んで学びたい学生にいい環境が揃っていること。大学のゼミでは、かねてより興味があった、開発経済学のゼミに入り外務省や国際協力機構(Japan International Cooperation Agency: JICA)、アジア開発銀行(Asian Development Bank: ADB)に訪問、3年次には現地で行われている開発プロジェクトを視察するために、ベトナムへ行きました。実際に訪問してみたベトナムは、日本で想像していたものとは全く異なっており、ゼミの恩師である木原教授の「実際に足を運んで自分の目で見なさい」という言葉を実感しました。

また、ゼミの活動にとどまらず、地域活性化への興味から、CLOVERの縁で他のゼミの学生たちと意気投合、共に地方創生、地方活性化についてトークセッションに参加、2016年春には国務大臣地方創生・国家戦略特別区域担当の石破茂衆議院議員(肩書は当時)に対し学生の立場からの提言を行いました。

周りから支えられて今の自分がある

ベトナムでの現地視察、石破衆議院議員との対談のチャンスなど貴重な機会を与えてくれたのは、学びたい気持ちに共感してくださった、先生方、同じ志を持つ獨協の仲間でした。4年間過ごす中で大変だったことは往復4時間かかる通学で、時間の制約上、好きな授業を履修できない、往復だけでヘトヘトになってしまうなど、困難続きの毎日ではありましたが、乗り越えることができたのは、やはり大学に「信頼のおける人たちが」いたからです。指導して下さる先生方や、ゼミの仲間、CLOVERのメンバーがいたからこそ、今の自分があるのだと思います。

在校生、高校生へのメッセージ

やりたいことは、最後までやり切ってください。何事も、苦手と決めつけずにチャレンジしてみることで新しい発見があると思います。様々な気付きや、人との出会いを大切にしてください。

インタビューより

獨協大学は川津さんのような能動的に行動する生徒を支えてくれる大学だと改めて感じました。初対面の私たちにも「何か困ったことがあったら相談して」と、頼りになる川津先輩の人柄を感じる事ができ、大変良いインタビューになりました。(関根)

川津さんの積極的な姿勢に刺激を受けました。私も残りの学生生活を充実したものにできるよう、目的意識を持って過ごしていきたいです。(大塚)



20歳代代表

追求し、次の一步へ

株式会社三越伊勢丹 2013年経営学科卒 有吉ゼミ あかいし 赤石 なお 奈緒 様

追求の大学4年間

所属していたバレーボール部を途中で辞めてしまったことをきっかけに、学校生活を思うように過ごすことができなかつた高校時代。その時感じた悔しさを私は今でも忘れていません。そこで、やると決めたことはやり遂げ、自分の成長に繋げられる4年間にしたいという強い思いを抱き大学へ進学しました。「自分を変えたい、普通のレベルで満足するのではなく確固たる自分にしかない何かを持ち、本当の人間関係を築けるようになりたい」という強い決意を持って大学の門をくぐりました。そのため、高校時代に辛い経験をしたバレーボール部でしたが、かつて逃げた事実を払拭するためにあえて入部を決意しました。何があっても辞めないことを絶対条件として課して……。

自宅が大学から遠く、1年生の頃は始発に乗り往復4時間かけて学校に通っていました。毎日過密に授業を入れ、空き時間は図書館の個室での予習復習に費やし、授業の後の17時から20時までは部活動、その後は図書館の閉館時間まで勉強して、終電で寝ながら帰るという暮らしが1年間続きました。

2年生になり、私が所属した有吉ゼミは負荷の重いことで知られていました。他のゼミ生が課題のため残っている中、終電で帰らなければならない悔しさ。通学の往復時間をゼミに使うため、思い切って一人暮らしを決断しました。両親からは猛反対されましたが、社会人は自分の生活のことは自分でやるというイメージがあり、学生のうちに一人暮らしに慣れておきたいと以前から思っていたこともあって、全て自分でやることを条件に一人暮らしを許してもらいました。アルバイトができる時間も限られており、稼げる金額を逆算して家賃を決定しアパートを探したことを覚えています。

ゼミを第一優先とするゼミ生が多い中で、私は「かける時間よりも結果が全てである」と感じ、ゼミ、部活動のどちらに対しても絶対に力を抜かないという意識のもと、両立の姿勢を貫きました。だからこそ、バレーボール部の主将としてメンバーを牽引し、厳しいといわれる有吉ゼミで結果を残すことができましたと思います。空いている時間は生計を立てるためのアルバイトに消えてゆき、まさに自分の使える時間を切り詰めた4年間でした。大学生活での学生らしい思い出は卒業旅行ぐらいしかありませんが、入学時に目標としていた「やりきる経験」を積むことができ、バレーボール部のメンバーやゼミの仲間に支えられ乗り越えることができたとても充実した大学生活でした。

セルフブランディングを目指して

アパレルショップの経営をしている親の影響から、将来は紳士衣料に携わる仕事に就きたいと考えていました。現在の勤務先に就職するきっかけとなったのは、大学3年生の時、夏のインターンシップに参加したことです。選考の過程で表面的に綺麗事を並べる会社でないことを知り、本当に信用できる会社だと思い入社することを決めました。

最初の2年間はお買場での販売担当として、商品を売るのではなく、お客様のライフスタイルに寄り添い、ご要望にお応えすることが大切であることを学んだ期間でした。ただ、目の前のお客様に商品の説明をするのではなく、お客さまとの接点を多く作ることを心がけ、フロアでの売上1位を目標として努力を積み重ねた結果、お買い場の平均売上の230%を達成することができました。振り返ってみると、がむしゃらに取り組んだ大学の4年間があったからこそ、社会人になり計画を立てて行動することができたのだと思います。私は社会人4年目になりますが、入社してから毎年部署が変わっています。部署を異動することは毎年転職を経験しているように感じます。業務や新しい環境に慣れ、新しい職場の中でどう頭角を現し成果を出せるのかが問われています。いかに効率的に業務を進め、周囲を巻き込んでいけるかが毎日の課題です。

紳士衣料に携わりたいという思いは変わらず、今後はパイヤーになるための試験を受けようと考えています。毎日が忙しく、まだ仕事が好きとは言いきれません。辞めたいと思うこともありますが、日々の悔しい思いがプラスに働いています。ここで負けてしまえば高校時代の自分と同じになってしまいます。悔しい思いから抜け出すためには、やり切るか・辞めるかの2択しかありません。まだ一日頑張れる気持ちがあるなら出勤しようと考えて日々を乗り越えています。離職率が高いと言われる新卒3年目を乗り越え仕事を続けていられる理由は、大学時代にゼミと部活動を最後までやり切った経験があるからだと感じています。

学生は、社会人と異なり自分の配分で時間を決めることができます。唯一平等に与えられた資産である時間をどのように使うかによって、可能性は無限に広がります。無意識にしていることをどう意識化できるかによって、自分の時間の使い方や行動に差が出てくると私は思います。無意識のうちに時間を浪費するのではなく、決めた目標に向かって今できることは何なのか、意識することで学生生活も変わっていくのではないのでしょうか。



インタビュワーより

自分を追い込むことができる人は本当に強いと感じました。頑張りたいという気持ちを大切に、最後までやり切ることが次のステップに繋がり成長になるのだと思います。今の生活を見直す機会になり、残りの大学生活を有意義な時間にしたいと思います。お忙しい中貴重なお話を伺うことができ、意識を変えることのできる時間でした。(鷺見)

今回の赤石様のインタビューを通して私は4年間という大学生活の時間をどのように使うべきなのかと考えさせられました。社会人になると自分自身に使える時間は限られています。赤石様は大学在学中ゼミ・アルバイト・部活動と目一杯のスケジュールを入れていました。これは一見大変そうに見えますが、大学在学中にしかできないことです。私も残りの大学生活を自分自身のために有意義に使おうと思いました。(大塚)

指導教員から赤石奈緒さんへ

赤石さんと初めて出会ったのは1年次に課せられている必修科目の経営学でした。グループワークで行う課題に必死に食らいつく姿が“草食”と揶揄されがちな現代学生には珍しく、とても印象に残っています。その姿勢は3年間のゼミ生活を通して変わることはありませんでした。体育会で培った厳格さと温かさは後輩指導にも生かされ、ゼミのマネジメントで私が判断に迷った時にも適切なサジェスションをくれたと思います。百貨店は上下関係が厳しく、お客様へのホスピタリティも要求され、まさに赤石さんにとっては適職だったのではないのでしょうか。クリック1つでモノが買える時代において百貨店は何を目指すのか、将来彼女がその答えを示してくれることを期待してやみません。

(経営学科教授 有吉秀樹)

30歳代表

常に向上心を持って

NHK 富山放送局アナウンサー 2008年経営学科卒 2010年経済学研究科修了 岡村ゼミ ^{みひら}三平 ^{やすたけ}泰文 様

“知る”ことからの挑戦

中学3年生の頃、教師である父から将来のことを考えるように言われました。当時見ていたドラマの影響もあったのでしょうか、パワフルに活動するテレビ番組の世界に憧れを持ち、ただ漠然とですが、マスコミ業界で働いてみたいと思うようになりました。もちろん、世の中の色々な職種を知っていた訳ではありません。しかし、少しでも早い時期に将来を考えられたことは良かったと思っています。

そこで、マスコミに就職する人が多い大学を志望しましたが、受験では望む道を進むことはできませんでした。入学当初は「獨協からマスコミは無理だよ」という言葉を投げかけられ、かなりショックを受けたこともありましたが、しかし、過去の卒業生を見れば、色々な場所で活躍されている先輩方がいらっしゃいます。獨協からでも、もちろんマスコミに行ける可能性があるかとわかり、負けずに自分の夢を声に出して語っていました。多少力みすぎていたかもしれませんが、とにかく自分を成長させたいと思っていました。私のモットーは「弱さゆえの向上心」。昨日より今日という意識で取り組み、自分の幅を広げようと様々な人に会いに行きました。人脈作りが目的ではなく、単にどのような人なのか、その方の人柄を知りたいという単純な思いでした。周囲の方からの紹介があれば、その機会を逃すことはないように努めました。そうして、多くの社会人の先輩方と会い、話を伺うことで「アナウンサーになるために学生生活を過ごす」のではなく「学生生活を思いきり満喫したうえで、気持ちが向く先に自分がやりたいことや将来がある」ことを知りました。「なろうとしてなる」のではなく、「自分の行きたい道が見えてくる」という感覚です。日頃からお酒を介した人とのコミュニケーションが楽しいと感じていましたが、それは、お互いが本音で語り、会話を楽しむ中で「人に伝える」ことが面白かったからです。「人に伝える」というキーワードで、将来の道をもう一度考え直しました。そして、多くの一生懸命な人たちと出会うことができ、取材し、その思いを一緒になって伝える仕事ができるのは、やはりマスコミでありアナウンサーという道であると実感しました。

今の私を形作っているもう1つの大きな要素は、やはりゼミです。大学2年生の時、サークルの先輩から「うちのゼミは厳しいが、一生懸命先生が鍛えてくれる。論理的な思考能力を身に付けることができる」と言われ、保険論の岡村国和先生のゼミに入りました。岡村ゼミは、他大学との交流が活発なゼミで、大学の枠を超えて数多く議論を交わすことができました。慣れない環境の中でも、「失敗も経験のうち」という意気込みで質問を投げかけ挑戦することで、他の学生とも渡り合えるようになります。初めは萎縮していましたが、恐れず一歩踏み出すことで、多くの経験を積むことができました。

失敗は成長の種

入局1年目はとても楽しかったと記憶しています。NHKでは通常、新入職員は地方勤務になります。佐賀への配属が決まり、知らない土地に根を下ろす面白さを知りました。その土地の特徴や県民性、地域性を知ることはとても楽しいです。自分が初めて全国区の放送でテレビを通してお茶の間に登場した時には、まさに「夢か現か」であり、今まで頑張ってきて良かったと思えた瞬間でした。

富山に転勤した現在でも、朝のフリートークで工夫してみたり、落語や歌舞伎から表現のヒントを探ったりと日々新たな挑戦をしています。物怖じせずに挑戦すると失敗することもあります。成長の種を得ることができます。失敗からどう改めるかが大事です。失敗を次につなげるためには、ネガティブにとらえるだけでなく、じっくり向き合うことが大切です。失敗していない人などいません。むしろ、失敗をしていない人はつまらないと思います。「自分と未来は変えることができる」という信念でプラスに繋げていけたらという心持ちでいます。

今後の希望は、東京で全国放送の番組を持つことです。全国放送で自分が見て感じたことを多くの視聴者に伝えることで、人に貢献できる機会が増えるのではないかと感じているからです。アナウンサーという仕事は思っていた以上に幅が広く、特産品の中継、スポーツや報道番組の司会者など、様々な角度・立場から、視聴者に何らかの影響を与えることができると考えています。学生時代から今まで魅力的な方々に出会ってきたことを力に変えて、人に貢献し、人の心をそっと元気づけられる人になりたいと考えています。

大学生はちょっとしたことで変わることができます。自ら可能性を限定するのではなく、夢を大いに語り、勇気を持って挑戦して行ってほしいです。その姿勢が人を繋げ、道を切り開くこととなります。失敗から学び、また挑戦をすることで自らの引き出しを増やし、本当に自分が幸せになれる道を探し出してください！



インタビュワーより

三平様はとても陽気で気さくな方でした。お話も大変お上手で、特に話の中に他人を引き込む力を強く感じました。ついインタビューということをお忘れ思わず聞き入ってしまうほどでした。素敵なお話を直に聞かせていただけて大変有意義な経験でした。(宇佐見)

私達学生に対して正面から向き合って話をして下さい、「人の心をそっと元気づけられる」という言葉を体現されている方だと感じました。言葉一つ一つにエネルギーがあり、私も三平様のような社会人になれるよう、目標に向かって頑張っていきたいと思います。貴重なお話を伺うことができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。(鷺見)

指導教員から三平泰丈君へ

三平君は私のゼミの3年次から対外交渉に積極的で、ゼミ長と渉外係のどちらになってもおおうかと考えましたが、結局、渉外係になっていただきました。彼の能力は学内だけでは収まりきらないだろうと考えてのことですが、それが見事に開花し嬉しく思います。マスコミ関係の仕事がしたいという彼の夢を聞いたとき、私の友人で当時民放の役員に連絡し私自身も初めて彼と報道局の内部を見学しました。やはり現場は圧倒的な迫力があります。残念ながらそこにはご縁がなかったのですが、ご縁があつてNHKアナウンス部員という適職を得てますます活躍している姿を見ると、人の縁(えにし)というのは奥が深いとしみじみ感じます。これからもどんどん活躍して、富山から渋谷(放送センター本部)に帰ってくる日を楽しみに待っています。

(経営学科教授 岡村国和)

40歳代表

“プラス思考”が人生を切り開く

衆議院議員 1996年経済学科卒 松本ゼミ たばた 田畑 ひろあき 裕明 様

大学から銀行時代

大学の4年間は、自分の時間を自由にできるとも大切な時間です。私は、この時間を最大限に活用したいと思い、様々な機会を捉えて多くの方と出会うように心がけました。人との出会いが自分の幅を広げてくれると信じていたからです。幼少期から続けている野球やスキーなどスポーツを通じて多くの指導者や仲間との出会いがありました。ルールのある世界で結果を出すというスポーツのこの貴重な経験が今の自分の糧になっていると感じています。

団塊ジュニア世代と呼ばれる私たちが就職活動を迎えた頃は、バブルの後遺症も残り、企業が就職を抑制し暗い世相の中でしたから、会社に頼るのではなく、自ら高みを目指し、力をつけなければならぬと考えていたように思います。時代が転換し、会社に頼るだけでは駄目だという気運の中、30歳を節目とし、そのために20歳代をどう過ごすかということ意識していました。

漠然と起業したいという思いがありましたが、当時はITも普及しておらず学生が起業することは今ほど容易ではありませんでした。就職先として銀行を選んだ理由は、世の中の経済社会を実態として理解し、起業という目標にも繋がると思ったからです。銀行はお金を扱う信用商売です。当時は今以上に金利の規制があり、他行と差別化するためには人が勝負でした。物ではなく信頼を売る商売の中で、人間性が試され、一つ一つの身のふるまいを鍛えることができました。



政治家の道を決断

銀行に勤めていた時、町役場に出入りすることが多く、地域おこしや地域活性化など祭りやイベントを催す方々とお会いする機会がありました。そういった方々とかかわる中で、公的な仕事で人の役に立てる面白さを肌で感じ、定年までサラリーマンとして勤めあげるよりも自ら行動を起こしたいという思いが強くなり、地域のために働くプレイヤーとして頑張ることを決意しました。当時を振り返ると、若気の至りかもしれませんが根拠のない自信はありました。しかし、それは自分に理念や思いがあり、何かに挑戦したいという燃える気持ちを強く持っていたからだと思います。また、私の父親も脱サラから起業した経験を持っており、“自分の人生は自ら切り開いていく”という家風であったことも私が政治家の道を進む後押しになりました。

29歳で7年間務めた銀行を退職し、翌年には市議会議員に当選を果たしましたが、親類縁者に政治家だった者はおらず、独学からのスタートでした。自分なりに、先輩方や書籍などから学び、型にはまらずスタートを切りました。市議会議員、県議会議員、衆議院議員と道を歩むこととなりますが、出会った多くの方々に導かれ、助けられながら、最後は自分で決断して今日に至ります。いろいろな方々との出会いに深く感謝しています。どんな時でもむしゃらに、やる気があれば、道は開かれます。いろいろなことに対し、受け身ではなく、前向きに受け止め、プラス思考で行動していくということが今の自分を形成していると感じています。

これからも様々な問題に直面することでしょう。しかし、そんな時も後ろ向きに捉えるのではなく、正面からその問題に対峙していきたいと思っています。山を登った人でなければその先にある更に高い山と対面することはできません。用意周到な準備とやる気そして根性があれば、肉体的には辛いことがあっても限界を超えていくことができると思います。越えられない山はないという気持ちで高みを目指していきたいです。現在は、厚生労働関係の仕事をしており、働き方改革や労働力の問題に対して、どのような世の中を創っていくべきなのか、どう導いていくべきなのか議論を重ねています。これから社会に出ていく方々が、努力の報われる社会にしていきたいと考えています。今後、私たちの世代が国を背負っていかねばなりません。これからも前向きに楽しみながら取り組んでいきたいと思っています。

高校生・大学生にむけて

図書館で勉強することも重要ですが、むしろ好奇心を抱いてアクティブに行動することが大切だと思います。感受性が豊かな学生時代には、自分を見つめ直し、興味関心のあることに対して信念や継続性をもって挑戦してください。そして自分の幅を広げて欲しいです。学生時代の延長線上に社会人があり、言動に繋がっていきます。小さくまとまっている自分を出すのではなく、若いうちは尖っているくらいがちょうどいいです。自分がどうありたいのか、自分自身を表現できるようになってください。そういった人材を企業も求めています。10年後の自分を想定し、逆算して自己投資をしてほしいです。柔軟に挑戦し、若い時の行動力と気力を活かしてください。

インタビューより

田畑様のお人柄に触れ、私達学生の将来を、受け身ではなく、ご自身が本気で良くしていくために行動されていることを肌で感じました。これから社会に出ていく身として、田畑様のように後ろを振り向くことなく、努力を積み重ねたいと思います。直接お話を伺うことができ、貴重な経験を積むことができました。(鷺見)

何事にも前向きな姿勢や、一度決めたことは貫き通す責任感・継続性が田畑様の根本となっていて、これらが多くの人の信頼を得ているのだと感じました。私もこれから興味・関心のあることに前向きに取り組んでいこうと思いました。(福島)



50歳以上代表

ミッションにどれだけのものを返せるか

株式会社ニュー・オータニ 代表取締役常務 ホテルニューオータニ 総支配人 1979年経済学科卒 松岡ゼミ しみず はじめ 清水 肇 様

“カッコイイ”ホテルマンとの出会い

大学4年生の時、就職活動開始前の約4か月間、語学留学のためカリフォルニアに行きました。そこで私は偶然ホテルニューオータニで働く、日系のホテルマンに出会いました。その当時は、私が学生の身分であるにもかかわらず親切に接してくれたホテルマンの姿をただ「カッコイイ」と感じただけで、まさか自分がホテルの仕事につくとは思ってもみませんでした。

日本に帰国後、当初、就職口としては両親や先輩の勧めもあり生命保険会社、リース会社、画商などを考えていました。そんなある日、ホテルニューオータニから獨協大学に新卒採用募集が来ていたのです。私は早速応募し、英語の筆記試験や面接などの採用試験を経て、無事入社に至りました。

すべての仕事を己の肥やしに

入社当初は客室などの掃除から始まり、ベルボーイやレストランのウェイターなど様々な仕事を体験しました。時には、毎日同じことの繰り返しで自分は何をやっているのだらうと考えたこともあります。しかし、「とにかくやるしかない」という思いで、上司の無茶な要求にも食らいついていきました。そんなある時、私は総務部に配属されました。正直、最初は不安だった総務部への配属も、会社の決裁書を取り扱う中で、それまで知ることのなかった会社全体の構造を学ぶことができると感じ、自分なりに仕事の意味を見出していきました。

私は仕事柄様々な職を経験していますが、どんな仕事にも意味があり、与えられた仕事にどれだけのものが返せるのかということが大切だと思っています。現在はマネジメントの立場に在りますが、今まで経験してきた現場すべての仕事で「現場で求められていることは何か」を考える助けになっています。与えられた仕事に対し良い結果を出すことで、自分の経験が培われると同時に周囲から信用され、次第に自分がやりたいことをさせてもらえるようになるのです。



周りとの関係づくりを大事に

ホテルには様々なお客様がいらっしゃいます。そのお客様一人ひとりの求めている要望が多様だからこそ、お客様と一番近い現場で働く部下とコミュニケーションをとることも大切です。自分の指針だけで動くのではなく、他の従業員や上司からアドバイスを仰ぐことでさらに自己成長ができるようになります。日々いろいろなところで顔を出すなど、幅広く周りとの関係を築くことで、初めて良い仕事ができるのではないのでしょうか。

インタビュワーより

自身がやりたいかやりたくないかだけで行動を決めるのではなく、周りから求められていることをも常に意識して取り組んでいくことが、清水様のように社会で活躍するには重要なのだと実感しました。(関根)

インタビュー前の私は「ホテル業は密接にお客様と関わるお仕事だから、信頼を得るためには様々な工夫が大切なものかもしれない」と予想を立てていたのですが、周りからの厚い信頼の土台には、清水様が日々、上下関係なく対等に相手と向き合い、感謝を忘れないようにするという、人付き合いをする上での基本を守り続けることがあるのだと痛感しました。(萩原)



第4回 経済学部プレゼンテーション・コンテスト開催報告

～天野貞祐記念館大講堂で8チームが熱戦～

企画趣旨

第4回経済学部プレゼンテーション・コンテスト(以下、プレコン)が2016年10月26日(水)、天野貞祐記念館大講堂において開催されました。プレコンは、①問題解決型プレゼンテーション能力の向上、②研究活動・ゼミ活動の成果の紹介などを目的に、2013年度に新設された制度です。

7月1日の応募締め切りまでに、11のゼミから計20件もの参加申し込みがありました。多数のご応募に感謝いたします。学生支援制度実行委員会で慎重に審査した結果、その中から8チームを本選出場チームとして選出しました。

本選実施要領

- (1) 研究活動やゼミ活動に関連するプレゼン
(1チームにつき少なくとも3人が発表)
- (2) 1チームの持ち時間は15分
- (3) 想定する聴き手は、参加チームが取り上げる研究活動分野に馴染みのない獨協大生



▲発表者の皆さんと審査委員

審査基準と結果

審査基準は、プレゼン内容(問題設定、論理展開、革新性、実現可能性)、プレゼン手法(言語表現、ストーリーテリング、資料の完成度)、チームワーク、全体的評価です。経済学部の教員7名が審査委員を担当しました。

8チームのプレゼンは、いずれもレベルが高く、普段の活発な調査・研究活動の様子が窺えるものばかりでした。審査委員会による厳正な審査の結果、次の5つのチームと個人(2名)に、賞状と顕彰金が授与されました。

最優秀賞 ラオスチーム(高安ゼミ)

優秀賞 大床ゼミ 第4期

優秀賞 ANGLE・U(岡部ゼミ)

経済学部長奨励賞 高松ゼミ

アイデア賞 木原ゼミ ジェンダー班

ベストプレゼンター賞(個人表彰) 長島楓さん(木原ゼミ、国際環境経済学科4年)
齋木希さん(高安ゼミ、国際環境経済学科3年)



▲最優秀賞を獲得した高安ゼミ ラオスチームの皆さん



▲ベストプレゼンター賞を獲得した長島楓さん
(木原ゼミ、国際環境経済学科4年)



▲ベストプレゼンター賞を獲得した齋木希さん
(高安ゼミ、国際環境経済学科3年)

出場チームとテーマ一覧

◎経済学科

- ラオスチーム(高安ゼミ)
「学生が挑むラオスのゴミ問題～環境教育によるアプローチ～」

◎国際環境経済学科

- 大床ゼミ 第4期
「学生の社会貢献意識からみた日本のフェアトレード普及」
- 木原ゼミ ジェンダー班
「さあ、キラキラママになろう!!～女性が働きやすい社会の実現に向けて～」

◎経営学科

- 有吉ゼミ 第12期
「UNIQLOマーケティング戦略」
- ANGLE・U(岡部ゼミ)
「中小小売店の魅力を訪日観光客へ発信!!～Japark～」
- 岡村ゼミ
「保険の銀行窓口販売手数料全面開示の提案～マイナス金利の影響を絡めて～」
- 高松ゼミ
「小川町での地域活性化活動」
- 平井ゼミ 新事業開発チーム
「民泊事業への挑戦～東京オリンピックへ向けて～」

学生が挑むラオスのゴミ問題 ～環境教育によるアプローチ～

高安ゼミ ラオスチーム

大会当日までの道程

私たちが今回のプレゼンテーション・コンテストで聴衆に伝えたかったこと、それは「獨協大生は日頃の学びを活かし行動すれば、世界に貢献できる」ということです。なんとなく大学に来て単位取得のためだけに授業を受ける。また、世界に貢献することに関心がある獨協生は多いが関心止まり。実は、プロジェクトが始動した半年前の私たちもそうでした。

私たちが所属する高安ゼミでは開発経済学を学んでいます。解決すべき課題を模索していた頃、経済発展に付随する途上国のゴミ問題に関心を持ちました。東南アジアの内陸国であり近年経済成長が著しいラオスでも、ゴミ問題が深刻化しており、2020年までにゴミの量が2～3倍になることを文献で知りました。私たちが実際にラオスを訪問し、ゴミ集積所に足を運ぶと、予想を遙かに超えた悲惨な光景が目に見え込んできました。現実を知ってしまった私たちは、今すぐ何かしなければとの衝動にかられました。

日本のラオス支援について調べたところ、ゴミ収集車や焼却炉などのハード面に集中し、ソフト面への支援が著しく不足していることが判明しました。私たちは、環境教育をソフト面への支援として位置づけ、ビエンチャン市のシーワッタナー小学校で授業を行いました。パワーポイントや日本の団体からお借りした3R学習キッドを使用した授業、知識確認のためのクイズ、そして子供たちと一緒に廃棄段ボールを利用したゴミ箱制作(reuse)を行いました。さらに、授業前後の子供たちの意識変化を検証するために、ラオス語で作成した行動変容アンケートを実施しました。たった一度の授業でも子供たちの行動に変化が認められ、環境教育によるソフト面へのアプローチが有効であるとの結果が得られたことは幸運でした。

世界で起きている問題に関心を持つだけでなく、大学での学びを活かし行動すれば、学生でも世界に貢献できることを私たちは体験しました。同じ体験を他の多くの学生にも味わってみたいと強く思い、プレコンに挑みました。プレゼン終了と同時に達成感と会場の一体感を感じた私たちは、涙を堪えることができませんでした。

感想

本番では3人のプレゼンターが自らの想いを乗せた発表を堂々としてしましたが、実は原稿が完成したのは大会前日でした。私たちはギリギリまで自分たちの納得いくものを作り上げるのに必死でした。ゼミの先輩と同期を前にプレゼンしてはアドバイスを頂き、練り直し、繰り返し練習。本番までに書いた原稿は6万字を超えました。ラオスチームの共有フォルダには、原稿、パワーポイント資料、アンケート等々、100を超えるファイルが保存されています。今振り返ると、8月上旬のラオス現地調査から大会当日までの約3か月間は非常に密度が濃い日々でした。自分たちの未熟さを知る一方で、行動一つで変化が起きることを知り、自分たちの可能性も実感できました。

今回、最優秀賞という素晴らしい賞を頂くことができたのは、大会運営を円滑に行って下さった先生方、運営スタッフの皆様、高安先生、ゼミ生、ゼミ外のアドバイザー、ラオスでの現地調査に尽力して下さいました方々などのご支援があったからです。心より感謝申し上げます。

(文責:経済学科3年 小林佳保里)

指導教員(高安健一先生)からのコメント

第4回プレコンに参加したのは、石川遥夏、小林佳保里、渡邊健太、齋木希、百武佐紀の3年生5人で構成されるラオスチームである。本番1週間前まで、自分達が伝えたいことを言語表現できずに苦しんでいた姿が印象に残っている。最後の1週間を、5人全員が体育会系のためか、知力、体力、食欲、巻き込み力、そしてチームワークで乗り切ったと伝え聞いている。

今回のプレゼンでは、自分達の成長過程とラオスの子供たちの環境問題に対する行動変容という2つのストーリーを、関心と行動をキーワードにシンクロさせながら展開するという、ストーリーテリングよりも高度な手法にチャレンジした。5人はそれを見事に消化し、プレゼンに仕立てたことを高く評価したい。

プレコンは大学での学びを豊にするアウトプットの場である。今回の経験を就活のみならず社会人になってからも活かして欲しい。



第4回獨協大学経済学部プレゼンテーション・コンテスト



現地調査に協力してくださったビエンチャン市シーワッタナー小学校の生徒と先生

本質を突き詰めた先の成長

有吉ゼミ 12期生

今年、日本経済を牽引してきた多くのカリスマ経営者が退陣しました。そんな中、第一線で活躍するカリスマ経営者がUNIQLO創業者の柳井正氏です。ヒット商品であるヒートテックの日本における所有率は9割を超え、衣料業界にイノベーションを起こしてきたUNIQLOですが、その勢いは一時ほどではなく衰えを見せています。何故、UNIQLOは私たちの生活に欠かせないものになったのか、また今後何をすべきかを問題提起とし、それを解明すべく戦略を立案しました。

私たちがマーケティングを学び、戦略立案を行う上で最も重要視しているのが消費者の心理です。消費者の心理なしに顧客の動向を掴むことも、企業の体質や問題点を探ることもできません。古来より“衣食住”と称されるだけあって、衣服は人間にとって必要不可欠なものでした。その分消費者の選択肢は多く、何千ものお店がある中で様々な思考で服を購入します。私たちは消費者の様々な服の使用や購入のシーンを思い浮かべ、5つの潜在的な消費者心理を導き出しました。高低差や組み合わせはあれども、この5つの心理ではほぼ全ての消費者を表すことができると自負しています。その中で私たちが注目したのは消費者の中に潜む「面倒くさい」という心理です。多くのアパレルブランドが価値の失墜を恐れ、この心理に踏み込むことを避けてきたのに対し、UNIQLOは敢えてここに照準を合わせ、高い参入障壁を築き、「服のインフラ」としての地位を不動のものとしていきました。

次に私たちはUNIQLOの企業体質を把握するべく、柳井氏の幼少期や企業の転換期を中心に様々な情報を集めたうえで、その成功した要因の仮説を立て、本部、店舗へのインタビューを実施しました。その結果、これまで採ってきた戦略のすべてに柳井氏の考えが大きく反映されていることがわかり、これを私たちは“柳井イズム”としました。しかし、柳井イズムは末端層へいくほど理解されていません。そこで、柳井氏と末端層までの社員が接する機会を増やすことで柳井イズムの浸透を図るとともに、「面倒くさい」という意識をもつ顧客層を取り込めるという強みを活かした究極の食の提供「UNIDELI」を戦略として提案しました。

私がプレコンに出場するにあたり学んだことが3つあります。まず1つ目は、「人から学ぶことの大切さ」です。有吉ゼミは縦の繋がりが非常に強く、OGやOBの方に意見を頂くこともできます。今までの課題でも先輩や先生に頼り、意見やフィードバックを頂くことはありました。しかし、プレコンに向けて更にその強さを積極的に活かすことができたと感じています。自分やグループの仲間だけでは考えきれないところを先生や卒業生を含む先輩方に頼ることは、より一層自分を成長させるものだと実感できました。2つ目は、「相手起点に立つこと」です。課題の過程や考えを全く知らない人の前で発表するのは初めてでした。そのため、どうすれば私たちの考えを理解してもらえるかということを第一に考えてプレゼンしました。伝えたいことをただ伝えるのではなく、伝えるべきことの優先順位を定め、起承転結を行い

惹きつけることで、聴いている側に配慮したプレゼンをすることができたと思います。これは今後何かを相手に伝える際にも重要なことだと感じています。3つ目は、「最後まで自分のベストを尽くすこと」です。私たちは提出する最後の瞬間までプレゼンをより最良のものにしようと努力しました。その結果、自分たちのプレゼンに満足することができました。もし、どこか中途半端な気持ちがあれば後悔していたことでしょう。しかし、私の気持ちに後悔はありません。

最後に、このような機会を設けて頂き親身になってご指導して下さいました有吉先生やプレコン当日まで支えて下さった卒業生を含む先輩方、そしてここまで共に刺激し合い成長してきた同期、さらには普段から私を気にかけて仕事の合間を縫ってプレゼンを見に来てくれた母にも感謝しています。プレコンを通して私は間違いなく成長できました。有吉ゼミに入って良かったと心から思っています。これからのこの気持ちを大切に、日々精進していきたいです。

(文責:経営学科2年 角谷有香)

指導教員(有吉先生)からのコメント

4年連続でプレゼンテーションコンテストに出場できたことをうれしく思う。今回取り上げたユニクロという企業、そして衣服という商材は学生にとって馴染みやすいものである。しかし、衣服にまつわる消費者の心理を解剖し、どのような要素を捉えてユニクロが今日の発展を遂げたのか、それを解明することは容易なことではなかっただろう。「服のインフラ」「都合の良い存在」などわかりやすい言葉で解き明かしてくれたことは秀逸であった。最終的な戦略は「衣」から「食」への展開であったが、欲を言えば、ユニクロが「衣」において築き上げた他社への参入障壁と同様なものが、「食」においても存在することを示せば、きわめて論理的整合性のある筋の良い戦略になったと思う。今後の成長に期待したい。



訪日客と小売店を繋ぐ架け橋Japark

岡部ゼミ チーム ANGLE・U

この度は、第四回経済学部プレゼンテーション・コンテストにおいて優秀賞を獲得することができ、大変嬉しく思います。ここでは、発表させて頂いたアイデアの内容と、このアイデアを通して実感したことについて書かせて頂きます。

私たちは訪日中華系・韓国人観光客に向けた中小小売店情報アプリ「Japark」を提案しました。観光庁や中小企業庁、743名の訪日中華系・韓国人観光客、255店の中小小売店への調査等から、①訪日観光客に対し、大手小売店の情報は提供できているが、中小小売店の情報は提供できていない、ニーズを満たしきれていない。②中小小売店は言語・資金の課題から、訪日観光客に対し、情報発信ができていない。という2つの課題を発見しました。以上のことから、私たちのMissionとしては「中小小売店の情報発信を行い、日本の深い魅力を訪日観光客に知ってもらおう」と定義しました。そこで、私たちは「訪日中華系・韓国人観光客」と「中小小売店」を繋ぐ場として、中小小売店情報アプリ「Japark」を提案しました。このアプリでは、中小小売店の店舗情報の文章や店舗紹介の動画といった、店舗側の生の声を発信します。大きなポイントとしては、店舗情報の文章の翻訳業務には、外国人留学生を起用し、コスト削減及び質の担保を図りました。中小小売店の言語・資金という課題を、この提案により解決できます。私たちの業務フローは以下の通りです。まず、PR希望店からPRしたい情報(店舗情報)を頂き、そのPRしたい情報(店舗情報)を外国人留学生に翻訳して頂きます。外国人留学生に翻訳して頂いたら、翻訳文章をアプリ内に掲載。その後、中華系・韓国人観光客へ情報発信していくという流れです。

このアイデアを通して、私は「インターネット(テクノロジー)は、マスメディアのような既得権益からの解放を促進し、より便利な社会を創造することができるツールである」と実感しました。従来、大規模なターゲットへの情報発信として主流だった手段は、テレビやラジオ、新聞、雑誌等のマスメディアでした。しかし、これらのマスメディアは、1つの情報を発信するまでに、介在する企業や人々が多く、高コストでの情報発信になってしまいます。それに対し、インターネットを活用

すると、介在する企業や人々を省き、中抜きを行うことができ、低コストでの情報発信が可能になります。それゆえ、情報発信にかかるコストが大幅に低下すると、誰しもが簡単に情報発信を行うことができる社会になるのです。例えば、Twitter上での各個人のツイート、YoutubeでのYoutuberなどが良い例です。これらのように、インターネットというメディアは、従来のマスメディアとは異なり、誰しもが情報を発信でき、また、今までには認知できていなかった、新たな情報を認知できる便利な社会を作り出しました。今回の活動で、上記のことを深く実感した私は、今後も、インターネット(テクノロジー)を活用し、今までにはできなかった、新たなサービスを創造し、より便利な社会を創造していきたいと思っております。

最後に、岡部教授をはじめ、応援して下さいました岡部ゼミ生の皆さま、協力して下さいました各省庁・各企業、訪日観光客、小売店の方々、このようなプレゼンの機会を提供して下さいましたプレコン関係者の皆さま、誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

(文責:経済学科4年 林暢彦)

指導教員(岡部康弘先生)からのコメント

プレコンの当日、集合時間の1時間前にグループメンバーが初めて集まりプレゼンの練習をした。ぶっつけ本番に近い。他のゼミとはプレコンへの思い入れが違う。見てないけど、林たちは楽しかったと言っていたから、良かったんじゃないか。ご苦労さん。



保険の銀行窓口販売手数料全面開示の提案 ～マイナス金利の影響を絡めて～

岡村ゼミ 生命保険班 金澤 岳彦、曾我 辰樹、田邊 瑞歩、名倉 周平

私たち岡村国和ゼミナール生命保険班は半年もの間、マイナス金利が生命保険会社に与える影響を学んできました。今回経済学部プレゼンテーションコンテストでその成果を発表できたことを非常に嬉しく思っております。

現在、日本はデフレーションと呼ばれる経済状態にあります。そこで日本銀行はデフレ脱却を目指すために新たにマイナス金利を導入しました。マイナス金利の導入により、銀行が日本銀行に預けるお金の金利がマイナスになり利息を支払う必要がでてくるため預金するメリットがなくなります。これはこれまで民間銀行が日本銀行に預けていたお金を市場に回すことで経済を活性化させ、デフレ脱却を目指そうというものです。つまり、マイナス金利は銀行への政策だということです。

しかし、デフレにより一般企業は借り入れる需要がなく、民間銀行は貸出による金融収益が見込みづらい現状があるなかでマイナス金利による影響も懸念されます。そこで、銀行は非金融収益である手数料ビジネスにより力を入れています。その手数料ビジネスの中には銀行の窓口で売られている生命保険商品も含まれていますが、研究を進めていくうちにその保険商品の一部の手数料が消費者に開示されていないという現状に気づきました。そして、銀行の窓口販売による保険の不当に高い手数料が存在することに行き着き、果たして消費者にとって透明性のある販売行為であるのかという疑問を抱きました。そこで私たちは消費者にとって透明性のあるものにすべく、保険の銀行窓口販売における手数料の全面開示を提案しました。

私たちは今回の発表にあたって様々な問題に直面しました。まず聞き手が学生であり保険に馴染みの薄いということです。私たちの発表では銀行で売られている保険の販売についての仕組みや複雑な金融商品をわかりやすく説明するにはどうしたらよいか、という部分に力を入れました。そこで学生が少しでもイメージしやすくなるように具体的な数値やわかりやすくデフォルメする工夫に全力を注ぎました。

今回のプレゼンテーションコンテストに向けて、様々な問題に直面しましたがそれらの問題を乗り越え、無事に発表ができたのは岡村先生やゼミの先輩方、そして一緒に研究してきた仲間たちのおかげだと思います。また、プレゼンテーションコンテストの経験はこれからも様々な場面で活用できると思います。この場で発表できたことに心から感謝します。

(文責:経済学科3年 金澤岳彦、経済学科3年 曾我辰樹)

指導教員(岡村国和先生)からのコメント

マイナス金利導入の影響というテーマは時宜を得たもので、他大学の保険関係のゼミでも研究されました。当ゼミでは少し角度を変えて、銀行の行動が直接保険会社に及ぼす影響に着目し、「保険の銀行窓口販売の手数料問題」に行き着いています。

当初の構成から何度も修正を加えて最終的にこの内容に落ち着きましたが、学生達の苦勞、ではなく努力は大変だったと思います。成果が報われないのが苦勞で、報われたのが努力であるなら、まさに努力に違いありません。そして、このテーマの構成と提案は十分にオリジナリティがあると思っております。

小川町での地域活性化活動

高松ゼミ

プレゼンコンテストの感想

高松ゼミでは地域活性をテーマに活動しています。埼玉県主催の「ふるさと支援隊」に応募して4年連続活動してきました。今年は一区切りを迎えることになり、プレゼンコンテストで発表したいと考え応募しました。

ふるさと支援隊は、圏内の高齢化、過疎化が進んだ中間山地域を我々学生の手で活性化するという試みで、小川町で4年間活動してきました。小川町は和紙が有名で、ユネスコ無形文化遺産に登録され、また有機農業も盛んです。

支援隊活動は、情報「発信」、訪問客誘致活動を通して、小川町で経済活動を行ってもらい活性化させることも目的です。

1年目は「小川町を知る」ことです。徹底的に町を歩き、地域についての理解を深める機会をつくりました。和紙作の体験、七夕祭りの運営や除雪作業も行いました。

2年目は中心地から見た「エリアマップ」を作成しました。小川町観光協会で配布しています。

3年目は地元の耕作放棄地でトウモロコシ栽培などを行いました。収穫祭を開き、地元の人たちとバーベキューや鍋パーティを行いました。

4年目は収穫した野菜を小川町の朝・夕市で販売しました。ただ売っているだけでは経済は活性化しないので、小川町の内外から集客するイベントを定着させ、伝統的特産品に目を向けさせることで購買意欲を高め、活性化につなげていこうと考えました。

今回のプレゼンコンテストに参加して、何も知らない私たちを優しく受け入れてくれたことや農作業を支援してくれた方々に感謝しなければならないことを再確認することができました。そして、あの緊張感の中でプレゼンできたことは将来役に立つものだと確信しています。これらのことを糧に私たちの活動をさらに良いものにしていきたいと考えています。

(文責:経営学科2年 埴原良介)

指導教員(高松先生)からのコメント

この朝・夕市の売上げを次回の農業資金に回すことで、各自の負担を減らす努力をしたことは評価できます。活動している学生を見て、道行く人が「こんなに人がいるなんて昔みたいだ」という声も聴け、ふるさと支援隊活動で地域の輪が広がっていることも確認できました。

小川町での活動は今年で終わりますが、地元からは来年も続けて欲しいという要望もあります。ひとえに学生の活動が地元の人たちに認められたということでしょう。4年間という短い活動ではありましたが、学年が入れ替わっても継続性を持って活動することができ、結果的に小川町の活性化に一石を投じることができたと思います。



まつりの運営



空き家を活用した民泊ビジネス

平井ゼミ 齋彰吾、林愛美、吉長由里子、岩井慎吾、越川嵩太

報告要旨

2020年の東京オリンピック開催にあたって問題視されているのが、宿泊施設の不足です。今後の外国人観光客の増加を考えると、この問題は将来に大きな影響を及ぼすと私たちは考えました。一方で日本では近年、人口減少を踏まえて空き家の増加が社会問題化しています。

こうした時に知ったのが、海外ではポピュラーとなっている「民泊」と「Airbnb」(民泊サイト)の存在です。これらをうまく掛け合わせれば、両者の問題解決に貢献できるのではないかと考えたのが今回のプレゼンです。さらに「学生」と「大学」というキーワードを加えて、新たな民泊像を提案しました。

報告者の感想

「今回のコンテストでは、報告内容やプレゼンの制作過程において反省点ばかりが残り、しかも目標としていた入賞も果たすことができず、悔しい結果となりました。しかし、チャレンジしたからこそ得られたものも、とても大きかったと思います。この経験から学んだことを無駄にせず、今後様々な活動に取り組んでいきたいと思っています」。(齋)

「東京オリンピックに向けて、宿泊施設の不足をテーマに民泊を主とした新たな提案をしました。民泊は現在進行形で様々な取り決めがなされており、新たな法規制や情報を取り入れた解決策の提案にとっても苦労しました。今回、大勢の人達の前で自分達の考えたプレゼンテーションを行うことができ、貴重な経験となりました」。(林)

「今回のテーマは専攻範囲外の問題だったこともあって準備に手間取り、プレゼンができあがったのも締切り直前でした。本番も、みんなに伝える・訴えることができなかつたかもしれません。ただ、今回のプレゼンを通して、チームで1つの答えを出すことがどんなに難しいかを体験することができました。この経験を、次の機会にどう活かしていくかを考えています」。(吉長)

「今回私たちは東京オリンピックに向けて民泊事業を取り上げました。民泊のことを調べていくうちに、民泊は面白い事業だと思いました。初めてのことであったので、いろいろ大変でした。今回経験したことは、今後の自分に大きく影響すると思います」。(岩井)

「今回のプレゼンテーションコンテストは時期が雄飛祭の準備と重なったために、完璧な準備ができたとは言えないものでした。でもアンケート活動やミーティングを通して視野が広がり、自分の新しい可能性について考えることができました」。(越川)

指導教員(平井岳哉先生)からのコメント

今年の報告テーマは、「空き家を活用した民泊ビジネス」である。増加する外国人観光客を踏まえて、埼玉県東部での民泊事業を獨協大学が実施することを想定するものである。

分析により、採算性はもちろんのこと、学生・住民と外国人観光客との交流を通じた大学教育へのメリットや地元への社会貢献、そして国内外への大学のPRなど、様々なプラスの効果が明らかになった。タイムリーな話題であるとともに、大学の新たな役割を提言するという点で若者らしい斬新さを感じた。

プレコンへの参加を通じて、人々を納得させるための資料づくり、そして多くの人々の前で報告するという貴重な体験を出場者はしたはずである。この体験は彼らにとって思い出と自信になったはずであり、社会人生活でも役立つ日が来るものと信じたい。



学生の社会貢献意識からみた日本のフェアトレード普及

大床ゼミ第4期 宮澤和希、安重勇貴、石田真夕、小張由佳、工藤恵美加、中村真由子、高橋遼、多田裕哉、原田拓弥、須賀匠

報告要旨

海外の先進国で大いに展開されているフェアトレード食品について、日本国内ではまだ普及しているとは言い難い。また、フェアトレード食品自体、高額であるというイメージがついて久しい。ただし、市場の需要と供給を考えたときに、消費者、需要側の支払意志があるならば、決して高額であるとは一概に否定できない。そこで、身近な獨協大学学生について、フェアトレード食品に対する支払意志を計測し、需要側の意向を調査することとした。なお、コーヒー豆はフェアトレード食品として広く認知されていることから、カップコーヒーを事例として調査した。

我々は、選択実験(choice experiment: CE)を用いて、「どこの」「何に」売り上げが用いられるのかに対する支払意志額(willingness to pay: WTP)を計測することで、上記の課題に取り組んだ。フェアトレード食材が100%用いられているものにはフェアトレード・ラベルの貼付が認められており、各種食品ラベルに対しては有意に正のWTPが存在すると知られているため、さらに進め、「どこの」「何に」売り上げが用いられるのかに対するWTPを計測した。なお、コーヒー豆産地については南米・アジア・アフリカ、フェアトレードにおける貢献対象は生活自立支援・人権教育支援・伝統農法支援、市場価格を参考にしたカップコーヒー価格を加え、CEのプロファイルおよび選択セットを設計した。

分析の結果、南米に比してアジア、アフリカの順にWTPが高く、伝統農法に比して人権教育、生活自立に関する支援の順にWTPが高いと示唆された。今後は、このように需要調査も丁寧に行うことで、より有効にフェアトレード食品を普及できると思われる。

コンテストを通して得たもの

私たちは、コンテストを通じて以下の点に気づき、能力を拡張しました。

ひとつめは、業務へのこだわりとメ切とのトレード・オフです。スライド資料や読み原稿のこだわりや精緻化は重要である一方、あらゆる業務にはメ切があり、メ切を見据えたうえでどこまでこだわりきれるのか、という点を考えねば、よい仕事ができないと気づきました。

ふたつめは、事情を知らない第三者のチェックを受ける大切さです。多様な先生・先輩・同期の学生などに、アンケート調査票からプレゼンテーションまで、これまでの私たちの調査概要等の事情を知らない人々に見ていただくことで、自分たちでは気づかない欠点、新たな工夫点が判明しました。ひとりよがりにならないための工夫を常に考えねば、よい仕事ができなと感じました。

今後はこれらを携え、人生を着実に歩んでまいります。なお、このような点について気づく機会を設けてくださった、コンテストとその運営者の皆様に感謝いたします。また、今回、大床ゼミ第4期の他のメンバーも、サポート業務に就いていただきましたので、以下に順不同で列挙して、本稿の結語に代えます。大熊あすかさん、鶴貝宗哉くん、永井博くん、中野美穂さん、根岸誠くん、石川彩香さん、岩瀬可奈さん、小林勇輝くん、富田有里さん、山来亜矢さん、青木里菜さん、加瀬紗彩さん、平田瑞季さん、満田歩美さんです。本当にありがとうございました。

選択実験の選択セット

	1	2	3
産地	アジア	南米	この組合せからは 選べない
貢献対象	生活支援	伝統農法	
価格	280円	420円	
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

指導教員(大床先生)からのコメント

教員の予想を上回る資料を作成し、よい調査研究報告であったと思う。今回のように、こだわりつつもメ切を厳守すること、良き第三者チェックを受けることは、今後の人生にいきるものと確信する。本学内外の教職員・報告者知己の学生・回答者学生の皆様に支援されて完成させることができたこと、ここに記して報告者とともに深謝する。

さあ、キラキラママになろう!! ~女性が働きやすい社会の実現に向けて~

木原ゼミ ジェンダー班

私たちは班のメンバーが全員女性だということもあり、就職活動をしていく中で「結婚・出産後も働きやすい会社か」ということに焦点を当てていることに気づきました。そこで今回、経済成長に伴いクローズアップされる男女平等や女性の地位向上などのジェンダー問題について取り上げ、課題解決に向けたプロジェクトの提案を行いました。

当初、私たちはアジア諸国における女性の社会進出について調査し、その問題への処方箋を提案しようと考えていましたが、ジェンダーに関する様々な統計を見ると日本の方が圧倒的に開発が遅れていることが分かりました。世界経済フォーラムが発表している男女平等ランキングでは日本は111位と、先進国の中でも非常に低い水準でした。さらに、日本では8割以上の女性が出産後も働く意思がある中で、働く女性の3人に2人は妊娠・出産を機に仕事を辞めているというデータもあります。果たして今の日本は女性にとって働きやすいと言えるのでしょうか。このような現状から、まずは日本への処方箋が必要だと考え、議論した結果、日本が抱えるジェンダー問題に密接に関わっているのは「アンコンシャスバイアス」という結論に至りました。アンコンシャスバイアスとは、無意識の偏見・過去の経験などから植えつけられたイメージのことを言います。私たちが行ったアンケートでも男女共に8割以上が「男性よりも女性が育児をするべき・したほうが良い」と回答しており、これもアンコンシャスバイアスの一つであると考えられます。そこで、女性が働きやすい社会の実現に向けての第1段階として、まずは意識の改革が必要だと考え、「キラキラパパになろう!プロジェクト」を提案しました。このプロジェクトでは、初めにワークショップを通して妊娠・出産・育児についてのイメージを発表してもらい、続いて妊婦体験、出産体験ビデオの視聴から、妊娠中の女性への理解を目指します。最後に受講前の自分のイメージと比較し、アンコンシャスバイアスに気付き、意識の変化、そして行動の変化に繋げていくことが目的です。このプロジェクトを広げていくことで、多くの人の意識や行動が変わっていけば、日本の女性がキラキラママになるのではないのでしょうか。また、今回は女性に対するアンコンシャスバイアスに焦点を当てていますが、女性に限らず一人一人が相手のことを思って行動できれば誰にとっても過ごしやす、働きやすい社会が実現できるはずですよ。

今回、プレコンへの参加を通して、私たち自身もアンコンシャスバイアスに気付くことができ、来春から社会人になるにあたって、将来のこと、女性の働き方、妊娠中・子育て中の女性への理解についても考えるきっかけとなりました。また、発表後に私たちが実演した手作りの妊婦体験ジャケットに多くの先生方や学生に興味を持って頂いたことも、とても嬉しく思うと同時に、より多くの人に体験してもらいたいと改めて感じました。そして何よりも、班のメンバーと準備を進めていく中、学生生活最後のプレコンでまた少し成長すると共に、意見を出し合い、本気で議論できる仲間ができたことを本当に嬉しく思います。木原先生をはじめとする先生方、米山ゼミの皆さん、そして、9月に行われた成城大学、法政大学とのインゼミなどを通し、多くの方のご意見・ご協力の元で、最終的にはアイデア賞を頂くことができました。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

(文責：国際環境経済学科4年 小林奈都美)

指導教員(木原隆司先生)からのコメント

当初は東南アジアのジェンダー問題を研究するために結成した木原ゼミ「ジェンダー班」。しかしその過程で、東南アジアより「劣悪な」日本のジェンダー・ギャップを知り、研究の方向は国内のジェンダー・ギャップに向かいました。その結果、ジェンダー・ギャップの大きな源泉が職場環境にあることが判り、職場での出産・育児に対するUnconscious bias(無意識の偏見)を変えるべく、安価で誰にでもできる妊婦体験などの提言にたどり着いたようです。ジェンダー間の対立構図に陥らず、明るく学生でもできることで「キラキラママ」、「キラキラパパ」を作り出す試みは、まさに「アイデア賞」に相応しいと思いました。また今年もプレコンの実施運営に携わってくれた木原ゼミ生、有難う。スムーズな運営でプレコンも盛り上がりました。



今までの朗読経験を生かして

木原ゼミ 国際環境経済学科4年 長島楓

この度、本コンテストにおいて、ベストプレゼンター賞という素晴らしい賞を頂き、大変光栄です。この場をお借りし、御礼申し上げます。

私は高校の時から詩の朗読を通して、『人に伝える』活動を行ってきました。そのため、今回の発表では聞き手に伝わりやすい発表をするために以下の2点を心掛けました。

1つ目は言葉選びです。インパクトがあり、聞き手の心に残りやすい言葉をなるべく選ぶようにしていました。題名の『キラキラママ』という言葉も、チームで案を出し合って作りました。またアンコンシャスバイアス(無意識の偏見)という言葉も、あえて日本語よりカタカナ言葉を選んだのは、聞き手側にインパクトを与える目的から選びました。また、大まかな原稿の内容はチーム全員で考えましたが、自分のプレゼンする箇所は、最終的には自分で校正をしました。これは自分の言いやすい言い回しを入れられることや、逆に言いにくい言葉を避けるためです。そうすることにより、自然と原稿の棒読みではなく、自分の言葉になってくると考えたからです。原稿が納得する段階に持ち込むまでに、多くの初見の方達に何度も発表をして意見を頂きながら、何度も校正を繰り返しました。

2つ目のプレゼンの発表では、チーム全体を通して『メリハリ』を意識しました。特に伝えたい箇所は、ゆっくり読みアクセントをつける等です。そのことにより、聞き手側にとって私達のプレゼンの中で重要な箇所がわかりやすく、伝わりやすいと考えたからです。また、原稿を挟めるバインダーを統一して持ち原稿を片手に持ちながら発表することで、

自信を持って正確に情報を伝えることができました。また私達のチームが提案した妊娠体験バッグを実際に作り、発表の際に実演をすることで提案をよりリアルに感じて頂く目的からです。

以上のように、原稿の言葉選びや伝え方や見え方など工夫したことで、私達のチームの思いや提案が格段に伝わったと思います。

今回、本コンテストに参加するにあたって、チーム一丸となり失敗や挫折を繰り返しながら、最終的にはチームでアイデア賞、個人ではベストプレゼンター賞を頂きました。チームリーダーとして半年間プレコンに向けて奮闘してきましたが、このように結果に現れて本当に嬉しく思います。また、学生生活最後にメンバーと一緒に本気で何かに取り組むいい経験と思い出ができました。この度、本チームがプレコンに臨むにおいてご尽力いただきました皆様、誠にありがとうございました! 今後この経験を生かし、邁進していきたいと思っております。



3つのPに立ち返りプレゼンがステップアップ

高安ゼミ 国際環境経済学科3年 齋木希

この度、第4回経済学部プレゼンテーション・コンテストにおいて、ベストプレゼンター賞を受賞したことをとても光栄に思っています。この場をお借りして、指導してくださった方々、コンテストの運営に携わってくださった皆様、そして会場でプレゼンを聴いてくださった皆様に心より感謝申し上げます。

2016年3月以降、ラオスチームの5人は自分たちが関心を持ったゴミ問題にひたすら突き進んでいました。次第に、私たちは、自分たちのやってきたことやそこから得たことを、個人の学びで終わらせるのではなく、多くの人に伝えたいとの想いからかれました。そのアウトプットの場として選んだのがプレコンでした。しかし、準備期に、大きな壁にぶつかりました。それはプレゼンで重要なPeople(聴き手)、Purpose(目的)、そしてPlace(会場)の3つのPです。自分たちの関心や行動の対象であるラオスのゴミ問題が、想定される聴き手である獨協大生の興味から乖離していることに気がきました。プロジェクト内容は変えられない、では何を伝えるべきか…となった時、自らのプロジェクトをケースとして「学ぶだけでなく、行動して世界に貢献する」ことを獨協大生に伝えることをプレゼンの軸に据えました。

15分という限られた時間で、何をどう表現すれば伝えられるのか。ゼミの授業や他ゼミとの合同練習会などの機会でも、多くの方々に指導していただきました。学外の方からは、私たちの未熟さに

加えて、プレゼンの本質にかかわる大切なことを教えていただきました。そして、本番前日まで、チームで試行錯誤しながら何度も原稿を書き直しました。

私が会場で、胸を張って自分たちのプロジェクトについて伝えることができたのは、やってきたことへの自信、多くの方々の支え、そして仲間が存在があったからです。当日は、「私が会場を巻き込んでみせる!」「ラオスチームの想いを届けよう!」と強く想いながら舞台上に立ちました。そしてプレゼンの最後に、こちらからの問い掛けに聴衆が応えてくれたことを確かに感じられたときは、本当に晴れ晴れとした気持ちになりました。この満足感をチーム全員で共有できるところまで、精一杯やり切れたことは貴重な経験、そして宝物となりました。ありがとうございました。



現地調査に協力してくださったビエンチャン市シーワッタナー小学校の副校長先生とメンバー



プレゼン最後の獨協大生に向けたメッセージ

「第6回 CSR 構想インターゼミナール」で 最優秀賞獲得



経済学科教授 高安 健一

経済学科・高安健一ゼミ(開発経済学専攻)のCSRチームは2016年10月8日(土)に、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された「第6回 CSR 構想インターゼミナール」に参加し、最優秀賞、ポスターセッション賞、学生の投票で選出される学生大賞を獲得した。

この大会は、CSR 構想インターゼミナールが主催し、慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所「慶應・国連PRMEプロジェクト」が共催、そして日本経営倫理学会が後援するものである。書類選考を経て本選に臨んだ大学は、獨協大学、慶應義塾大学、東北大学、東北学院大学、淑徳大学、跡見学園女子大学、関西大学の7校。審査基準は、①独創的な構想力、②分析の緻密さ、③説明の整合性、④倫理的な考察、⑤発表上の工夫、⑥対応力とチームワークの6つである。2017年3月に、参加7チームの研究成果を纏めた『インゼミ学生論集』が完成する。

ミャンマーの女性を対象にした栄養改善プログラムについて発表

高安ゼミは、「ミャンマーの栄養改善プログラム～スピリナで母子の命を救え～」と題する15分間のプレゼンを行った(+質疑応答)。

ミャンマーでは栄養に関する意識の低さから、栄養バランスに著しい偏りが生じている。これに起因する症状の一つに、貧血がある。貧血は、妊産婦の出産時死亡や子供の知能発達の遅れなどの直接的な原因になり得る。先進国では貧血治療は簡単な方法で行え、死亡原因になることはまずない。私たちは、貧血による妊産婦死亡を防止する方法を途上国に届けなくてはならないと強く感じた。

こうした問題意識から、私たちは「スピリナ」という鉄分をはじめ多様な栄養素を含む藻に着目し、ミャンマーにおける妊産婦の貧血改善プランを考案した。これは、栄養教育とスピリナを摂取するプログラムを展開することで、栄養バランスを確実に改善し、貧血を減少させることを目的としたものである。スピリナの販売拡大に必要な長期事業計画も作成した。

プランの大きな特徴として、学生の社会的責任(Student Social responsibility)に着目し、学生が企業とNGOを結び

つけることで持続的な支援を実現させる仕組みを組み込んだことが挙げられる。質疑応答では、妊産婦に着目した経緯や、農村部ではなく都市部の中間層を最初の販売ターゲットにした理由等について回答した。

インターゼミナールに参加して

プロジェクトチームを結成してから半年の間、様々な壁にぶつかり、立ち止まっては悩み、進んではまた立ち止まり、プランを思うように纏めることができませんでした。先輩やゼミ生をはじめ、たくさんの人達の支えがあったからこそ、プランを完成させることができました。ぶつかることがありながらも共に戦ってくれたチームの仲間と、最後まで的確なアドバイスとともに私たちを奮い立たせ、導いてくださった高安先生には感謝しかありません。本当にありがとうございました。

高安ゼミは今年初めてCSR 構想インターゼミナールに参加しました。このような素晴らしい研究発表の機会を提供してくださった慶應義塾大学の梅津光弘先生、そして大会事務局の皆様にお礼申し上げます。

(文責:富田実結)

チームメンバー: 富田実結、山内優汰、横超茜(以上、国際環境経済学科3年)、木曾陽那子(経営学科3年)、古川和成(経済学科3年)

指導教員から一言

今回、関東に加えて東北や関西の大学による、優れた研究成果に接することができたことは教員にとっても貴重な経験であった。とりわけ、東日本大震災や熊本地震からの復興を加速させたいとの学生の想い、綿密な現地調査、そして普段のゼミでの研究活動に裏打ちされた研究発表は、いずれも着眼点が新鮮でレベルが高かった。見習うべき点が多い大会であった。

CSR チームの大会直前3日間のラストスパート、そして変身の様子に驚かされた。今回の経験を後輩に引き継いで欲しい。



CSRチームの5人と高安先生



参加7大学の集合写真

国内最大級の国際協力イベント 「グローバルフェスタ Japan 2016」に出展



経済学科教授 高安 健一

経済学科・高安健一ゼミ(開発経済学)は2016年10月1日(土)と2日(日)の両日、お台場センタープロムナード公園で開催された、国内最大級の国際協力イベントである「グローバルフェスタ JAPAN 2016」に出展した。

10万人が訪れる国際協力イベント

同フェスタはわが国の国際協力の日(10月6日)を記念して1990年から開催されている、外務省、独立行政法人国際協力機構(JICA)、そして特定非営利活動法人国際協力NGOセンター(JANIC)が共催する国際協力イベントで、毎年およそ10万人が来場する。今年は、2015年の国連総会で採択された「持続可能な開発目標(SDGs)」を踏まえ、「for the First Step~新しい目標に向かって~」を開催テーマに、援助関連政府機関、国際機関、自治体、大使館、NGO、企業などおよそ290の団体が参加した。大学のゼミとして出展したのは高安ゼミのみである。



お台場の会場入り口付近の光景

カBanの開発意義と制作過程を発信

出展ブースでは、途上国における蚊を媒体とした感染症を防ぐことを目的に、埼玉県伝統の伝統工芸である細川紙(和紙)と蚊よけ効果のある布を組み合わせて制作したトートバッグ(カBan)について、パネルやリーフレットを用いて解説するとともに、実物を展示販売した。およそ300人に、日頃のゼミ活動や、獨協大学のグローバルな学びを発信する絶好の機会となった。



来場者に説明するメンバー

グローバルフェスタに参加して

「もっと多くの方にカBanを知ってもらいたい」。こうした思いから、今回、国際協力イベントであるグローバルフェスタに参加することを決めました。

私たちのブースには、カBanを取り上げた2016年7月27日付け『日本経済新聞』をご覧になった方、国際協力に携わる獨協大学のOB・OG、カBanプロジェクトに興味をもってくださった方々なども立ち寄ってくださいました。カBanはオンラインストアで販売していました。グローバルフェスタでは、実際に商品を手に取り、私たちの説明に耳を傾け、購入した方が何人もいらっしゃいました。自分たちのアイデアや活動が対面販売というリアルな世界でも認められた気がして、とても感動しました。

さらに、高安ゼミの出展ブースを訪れた明治学院大学の明石留美子教授にお声掛けいただき、同大学でゼミの学生にカBanプロジェクトについてプレゼン、そして意見交換の機会に恵まれるなど、新たな繋がりが生まれました。

2年前の大学2年生の頃、1人の来場者としてグローバルフェスタを訪れました。それが今年には出展者として参加することができたのです。3年間高安ゼミで仲間とともに学んだ成果を、国際協力に関心のある人々が集う場で発信できるまでに成長したことを実感し、とても嬉しく思います。今回私たちが参加したことが、後輩の活躍の場が広がるきっかけになることを期待しています。

細川紙を提供してくださった鷹野禎三様、株式会社インセクトシールドジャパンの岩附毅様、高安健一先生をはじめ、プロジェクトを支援してくださったすべての方々に、メンバー一同より感謝しております。

(文責:片岡愛里)



虫よけ効果がある布を提供してくださった株式会社インセクトシールドジャパンの岩附毅さんと

◇カBanプロジェクトのメンバーは、阿部悠介(リーダー、経済学科4年)、原島沙英(経済学科4年)、片岡愛里(経営学科4年)、木内加奈子、小平マリア、丸尾耀平(以上、国際環境経済学科4年)の6名。

◇2016年4月に販売を開始したカBanは、お陰様で完売しました。

◇カBanプロジェクトの詳細については、本誌2016年 Vol. 29&30、『大学の力2017』(週刊朝日進学MOOK)などをご覧ください。

雄飛祭で 「第4回国際開発シンポジウム」開催 ～あなたにできる国際貢献～



経済学科教授 高安 健一

経済学科・高安健一ゼミ(開発経済学専攻)は雄飛祭1日目の2016年11月5日に東棟202教室において、途上国の妊産婦を支援する国際協力NGO・JOICFPから講師をお招きし、「途上国の女性が抱える問題～あなたにできる国際貢献～」と題する国際開発シンポジウムを開催した。雄飛祭での開催は4年目を迎えた。

考え、行動する

近年ジェンダーという言葉が広まる中、女性が抱える問題が改めて注目されている。国連によると世界の妊産婦死亡者数は30年前の52万人から29万人に減少したものの、依然多くの妊産婦が死亡していることに変わりない。その背景として、女性が抱える問題に関する知識を持つ現地人材の不足、病院などの医療施設の未整備、バランスを欠いた栄養摂取、衛生に関する知識不足などが挙げられる。私たちは、途上国の妊産婦が直面している現実に関心を持ち、自分達ができることに思いを巡らし、行動することが問題解決の出発点になると考えた。

JOICFP×高安ゼミ

シンポジウムは2時間にわたり、延べ40人ほどの聴衆を集めて行われた。まず、JOICFP 事務局次長の浅村里紗氏が基調講演者として、その活動と女性が抱える問題について報告した。JOICFPは現地でのプロジェクト終了後も、妊産婦や女性の健康を守る活動を継続させることを目的に、人づくりにも重点的に取り組んでいるとのことであった。

基調講演に続いて、高安ゼミ3年生のプロジェクトチームが、学生が考える国際貢献について発表した。まず、CSRチームは、ミャンマーにおける妊産婦の貧血の改善をテーマに、学生が企業とNGOを結びつけることで、持続的に国際貢献を行えるプランを提案した。鉄分やたんぱく質をはじめとする栄養素を豊富に含むスピルリナ(藻)と栄養教育を連動させることで、その摂取を都市部のみならず農村部に普及させる計画である。一般の人々が途上国で起きている問題にこれまで以上に関心をもてるように情報を伝えていくことも、国際貢献の一つになり得ることを強調した。



ダンスと歌で手洗いの仕方を教える学生

続いて登壇した参加型開発チームは、インドで実施した、石鹸を使った手洗いの習慣化に関する取り組みについて報告した。途上国の衛生問題を改善する方法として、石鹸を使った手洗いの費用対効果が優れていることを強調した。ダンスと歌を用いることで現地の人々の能動的な参加を促し、手洗いに関する「知識」と「習慣」を定着させることができるか否かを検証する目的で、ビハール州の学校で実施したアンケート調査結果について解説した。

今回のシンポジウムが来場者にとって、国際貢献の第一歩である「知る」ことに繋がったのではないかと。参加型開発チームの報告中に、インドで撮影した動画を熱心に観たり、手洗いの仕方を真似した来場者が大勢いたことも印象的であった。

日常のさりげない行動による国際貢献

JOICFP とプロジェクトチームの発表後に、日常のさりげない行動による国際貢献について、浅村氏、高安ゼミ生、そして来場者が意見交換をした。まず、「日常的に行っている国際貢献」について、学外からの参加者より「フェアトレードコーヒーを購入している」「会社で鉛筆を途上国に寄付している」「JOICFPのピンキーリングを購入した」といった事例が出された。そして「その行動により、何の問題を解決できるのか」という問いには、「就学機会が増やせる」「妊産婦を応援する活動に貢献できる」「児童労働を減らせる」といった回答が寄せられた。日常のさりげない行動でも国際貢献ができるとの認識を一同が共有したところで、シンポジウムは終了時刻を迎えた。

雄飛祭期間中に、高安ゼミの有志が、カンボジアの庶民のおやつであるチャイヨーを模擬店で販売した。予定販売数を上回る売れ行きとなった。チャイヨー販売の収益金8,957円、JOICFPが制作したチャリティーピンキーリングとホワイトリボンピンバッジの売上金86,000円、そして募金3,421円の総額98,378円をJOICFPへ送金しました。協力して下さったすべての皆様へ、この場を借りてご報告させていただくと共に、改めて御礼を申し上げます。

(文責:矢吹徳浩)



ゼミ生と学内外の来場者による意見交換

慶応義塾大学とのインゼミを通じて
人間形成を実感

経済学科教授 全 載 旭

獨協大学の建学の理念は「大学は学問を通じての人間形成の場である」です。皆さんはこの言葉の意味を実感したことがあるでしょうか？ゼミにおいて専門知識を修得することはもちろん大事ですが、私たちはゼミ活動を通して、この言葉の意味を改めて実感することになりました。

論理性と人間関係

私たち全ゼミは東アジア・中国に焦点をあてて中国経済について研究しています。毎週学生が決めたテーマを発表・質疑応答し、議論しています。このとき最も重視されるのが論理性です。発表者には、発表をいかに論理的に展開していくかが求められます。さらに議論の場を設けることで、ゼミ生の考える力を養っていきます。

また、私たち全ゼミは2年生から4年生までの3学年合同でゼミ活動をしています。その中で先輩・先生への接し方、言葉遣い、気配りを覚え、どのようにしたら円滑にゼミ活動していくことができるかを学びます。また、後輩へはそれぞれの学生の適正に合わせて先輩が指導し、人を動かすことの難しさを学んでいきます。このように、私たちはゼミという小さな社会単位の中で、論理性を養い、対人関係能力を向上させていきます。

インゼミへの参加

このようなゼミ活動の集大成として、慶應義塾大学と聖心女子大学とのインターゼミナールに参加しています。毎年「中国」を前提としてキーワードが設定され、各大学はそのキーワードをもとにテーマを設定します。今年度は残念ながら聖心女子大学は参加を見送りましたが、慶應義塾大学と大変中身の濃い合同ゼミナールを実施することができました。

今回のキーワードは「新常态」。私たちは比較的新しい研究分野である付加価値貿易統計に注目し、「東アジアの貿易体制下における中国産業構造の変化」について3年生で共同論文の執筆に取り組みました。今回の執筆過程では、一人ひとりの知識の差が大きいために明らかとなり、みんなで足並みを揃えることに大変苦労しました。そんなとき、先生から「共同で論文を執筆することの意味を考えなさい」とのお言葉を頂き、原点に帰ってもう一度、全員で論文に向き合うことで、ようやく論文を完成させることができました。インゼミ当日は両大学とも深く議論を交わすことで新たな友好関係を築くことができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。この体験こそが学びを通じた人間形成であると実感しました。

私はゼミ活動を通して、論理性は勿論、先輩後輩との人間関係、インゼミを通して築いた同期との一生の絆を得ることができ、大変充実した2年間を過ごすことができたと思っています。天野貞祐先生のお言葉を実感するまたとない機会でした。

(文責：国際環境経済学科3年 橋口さら)





経済学科教授 森永 卓郎

森永ゼミでは、プレゼンテーション能力の向上を目指して、2年生の春学期にブレインストーミングやKJ法による論点整理、ディベートや個別テーマによるプレゼンテーションなどの集中トレーニングをしています。その総仕上げとなるのが、毎年夏休みに行っている2泊3日のゼミ合宿です。ゼミ合宿では、普段大学では行っていないものも含めて、脳みその筋肉トレーニングをします。

今年は、9月17日から千葉県白子町の東天光という合宿施設で、3年生、4年生、OBも含めた合宿を行いました。

今年のゼミ合宿の内容は、以下のとおりです。

- ① **自己紹介<バス内>**
1分→20秒→5秒と時間が減っていく形式の自己紹介。
- ② **他己紹介<バス内>**
ランダムにペアを作り、相手を紹介してもらう。
マネージャーがタレントを売り込む形。
- ③ **ディベート<授業>**
グループ対抗のディベート。
- ④ **即興お話づくり<授業>**
3単語とテーマを提示。テーマに合った内容の話の提示した3単語を使って話す。
即興性を鍛える。
- ⑤ **プレゼン<授業>**
4グループに分け、プレゼンを行う。
- ⑥ **モノボケ<授業>**
例年通り。10～15周を予定。
- ⑦ **ショートコント<授業>**
ペアを授業②で提示し、授業③で発表。(3分間)
- ⑧ **もしもあなたが〇〇だったら<授業>**
様々なものに自分、または人を例えて表現する。
即興性と、自分、人を売り込む能力が鍛える。
- ⑨ **つまらない王決定戦(一発芸)<授業>**
一発ギャクでトーナメントを行いゼミで一番つまらない王を決定。
- ⑩ **すべらない話<授業>**
各自用意したすべらない話を披露。
- ⑪ **ドボンクイズ<授業>**
他の誰も発想しなかった回答を出した者の勝ち残り戦。

今年は、初めて学生だけのプログラム作成を3年ゼミ長の宮下太希君が中心になって行いました。若干甘いかなとも思いましたが、

2先生に聞くと、かなり厳しいトレーニングになったようで、ゼミ活動が軌道に乗ってきたなと感じています。

MBAホルダーを前にした プレゼンテーション



経営学科教授 有吉 秀樹

私たち有吉ゼミでは、1つの企業を取り上げ、そのマーケティング戦略を立案しています。1つの課題には約2、3ヶ月を要し、ゼミ生一同分析を深めた切れ味のいい戦略を目指し日々奮闘しています。

ゼミ1年目である2年生にとっての一大イベントは、10月21日(金)に行われた経営学修士(Master of Business Administration、以下MBAと略す)をお持ちの方に向けたプレゼンテーションでした。有吉先生のお声掛けで、早稲田、一橋など国内の有力MBAの出身者で現在も企業の経営企画など第一線で活躍する方々が日本テレビの会議室に集結しました。今回の課題はUNIQLOマーケティング戦略で、3班に分かれ6月から分析を深めてきました。分析のフレームを理解し成長していく2年生の1年間で、この課題が一番の長期間を要します。彼らの成長がゼミ全体の成長にもつながるため、先輩、また組織の一員として、3、4年生も奮闘しました。また、より良いフィードバックをいただくためには、こちらが今できる最高のものを持っていく必要があります。それが時間を割いて下さるMBAホルダーの皆様にも私たちができる最低限で唯一のことだと感じていました。

当日を迎えるまでに関門はいくつもありました。ゼミOBでユニクロ東京本部に勤務する今関伸弥さんのチェック、店舗・本部双方のスタッフへのインタビュー、さらには班の再編成や毎週の発表などです。目まぐるしい日々の中で最もお世話になったのは、今関さんでした。忙しい合間を縫って何度も大学に足を運んでいただいた上に、本部スタッフへのインタビューの機会も与えていただきました。自分の事情を一切持ち込まず、鋭いフィードバックを通して各班ならびにゼミ全体の士気を高めて下さいました。社会で活躍しながらもゼミに尽力して下さいるOB、OGの方がいるからこそ、今の有吉ゼミがあるのだと改めて強く実感しました。こうして、様々な人の力を借りながら2年生は少しずつ成長していきました。各班が抱える課題は様々で、中には個人で苦しんでいた人もいたように思います。どうすれば彼らが前に進めるかを考えたことは、私自身の成長にもつながりました。

本番当日。ぴりとした空気の中、各班の発表が終わるごとに優しくも本質を突いた質問が次々と飛びました。UNIQLOの現状は結局どうなのか。どこに問題意識を置いたプレゼンテーションなのか。この戦略をとるとどうなるのか。MBAホルダーの方々は誰一人手を抜くことなく、私たちに真剣に向き合って下さいました。また、こちらに還元しつつ自らも学ぼうとする姿勢には脱帽しました。2年生にとって、自分たちの戦略が大学を飛び出し社会という現実に置かれた経験は何にも代えがたいものだったと思います。彼らの更なる成長を確信した実りのある一日でした。

今回参加して下さいるMBAホルダーの皆様、荒木裕也様(三井住友海上火災保険株式会社 人事部)、小出浩平様(ワタミ株式会社 執行役員)、瀬井哲也様(株式会社バップ 取締役執行役員)、中島一樹様(株式会社三越伊勢丹ホールディングス)、仁平大祐様(ロンザジャパン株式会社)、余語将成様(株式会社東芝)、インタビューにご協力いただいたユニクロ東京本部の近藤様、大宮ルミネ店 店長の曾布川様、ゼミOBの佐藤祐一様(株式会社ベネッセコーポレーション)と今関伸弥様、いつもご指導して下さいる有吉先生に厚く御礼申し上げます。加えて、私たちを見守ってくれた4年生、協力し合った同期、この課題を乗り越えた2年生に感謝しています。ありがとうございました。

(経営学科3年 齊藤陽奈)

指導教員から一言

今年も第2回目となるMBAホルダーを迎えてのプレゼンテーションを実現することができた。6月からプロジェクトを開始したが、当初はその価値の重さが十分に伝わり切らず、OBによる叱咤激励や班の組み換えなど意識の高揚に腐心した。気づかないであろうと高を括っていた論理の矛盾点を即座に突かれるなど、改めてMBAホルダーの皆様が錆付きの無い戦略脳に驚かされるとともに、ゼミ生たちの大いなる刺激材料になったものと思われる。今後もこのような教育的効果の高いプログラムを続けてゆきたい。



マクドナルド本社でCEOを前にプレゼン



経営学科教授 岡部 康弘

12月9日(金)、新宿にある日本マクドナルド本社でゼミ生が、カサノバCEO(社長)や下平COO(副社長)を前に日本マクドナルドが今後成長するための企業戦略についてプレゼンを行った。以下その内容である。

私たちはマクドナルドの安全性に対する調査を行った。その結果、日本マクドナルドの食品の安心・安全への取り組みは日本の外食産業の中でも高い水準であることがわかった。しかし、顧客の認識に関する調査をKANO&IPAモデルで行った結果では、安全性に対する評価は低いものであった。つまり、マクドナルドが行っている実際の取り組みと顧客の認知との間にギャップがあることがわかった。私たちはそのギャップを埋めるため、安全に関する顧客の認知を向上させる提案をした。

提案の内容としては、消費者が持つ食品の安全性に対する様々な疑問に、カサノバ社長が直接答えるという内容の動画を来店者に向けて配信するというものである。各店舗の全席にNFCタグを内蔵したステッカーを貼ることによって、来店客はスマホをかざすだけで動画を見ることができ、SNSを介した拡散により認知を促せると考えた。この提案に対しカサノバ社長からお言葉をいただき、顧客に安心・安全な商品をお届けするための意識の高さを実感することができた。

(文責:坂井太一)

狩野モデルの結果より、清潔がマクドナルドの機会点としてあげられた。現在マクドナルドでは、マニュアルに沿った清掃を行なっているが、時間帯によっては清掃の行き届いていない箇所が存在する。そういった箇所を、顧客の目で調査してもらう必要があると考え、「Clean for you」の導入を提案した。提案内容は、マクドナルドが提供するアンケートアプリKODOに、清潔感に特化した新機能を追加することで、現在のKODOと異なる「フィードバックの速度」を実現することができると考えた。具体的には、顧客が店舗を調査し、その場でフィードバックを行うことで、

従業員に対する確かな清掃ポイントを可視化させることができる。つまり、Clean for youの導入により、清掃ノウハウやマニュアルを最大限有効活用することができると考えた。

上記の提案に対し、清潔さに対して力を入れている下平副社長から、提案の必要性と、それに伴うビジネスとしての難しさを、実践面からの視点でご指摘を頂き、大変貴重な経験となった。

(文責:長谷川蒼)

利用頻度の高い顧客ほど接客に対し満足を感じていないという狩野モデルを利用した調査結果を基に、クルーのサービス品質の向上に向けた提案を行った。顧客がクルーからサービスを受けた際に認知するサービス品質には2つの種類が存在する。企業の制度やマニュアルによって左右される提供品質とクルーのその場での感情によって左右される知覚品質である。現在の日本マクドナルドを調査したところ、提供品質への取り組みは外食産業でもトップクラスの徹底されたマニュアルが構築されている事が分かった。そこで私たちは知覚品質に着眼し、知覚品質を低下させる原因となる「コンタクトストレス」について、その対応策となるトレーニング方法を考案した。「コンタクトストレス」軽減のためのマニュアルを本部が設定することで、幅広い顧客層への柔軟な対応が可能になることが見込めると考えた。下平副社長からも非常に勉強になるというお言葉をいただくことができた。

(文責:小柳雄二郎)

担当教員からのコメント

多忙にもかかわらず、出席頂いたカサノバさん、下平さん、山下さん、また、この企画を運営していただいた蟹谷さんにお礼を申し述べたい。皆さん、マクドナルドという会社が大好きで、本当にi'm lovin'itでした。最後に仲介の労を取っていただいたオリックスの川端さん、ありがとうございました。





経営学科教授 岡村 国和

岡村ゼミでは今年度は3つの学外報告会に参加しました。一年間の成果として紹介していきたいと思います。

まず一つ目は11月26日に東京経済大学で行われた東京学生保険ゼミナールです。

東京学生保険ゼミナールには、慶應義塾大学、上智大学、東京経済大学、獨協大学、明治大学、早稲田大学の計7大学9ゼミ約200名が参加しました。

今年私たち獨協大学岡村ゼミは、テレマティクス保険による交通事故抑制を目的とした「交通事故の抑制～テレマティクス保険の活用～」を発表しました。質疑応答では、他大学の学生や先生方から様々な意見を頂き、多くの改善点を発見することができた為、次回の活動につなげたいと思います。

東京学生保険ゼミナールは1日を通して行われました。大学毎に異なったテーマについて発表を行った為、他大学の発表を通して多くの知識を得ることができました。私たちは半世紀以上の伝統ある東京学生保険ゼミナールにて発表する機会を頂き、また、他大学の発表を聞く機会を頂き、貴重な経験をすることができました。

この報告会を通して、他大学の皆さんの発表から様々な視点で保険を学び、疑問を持ち、知識の共有ができたことで大変有意義な報告会となりました。



3つ目は慶應義塾保険学会の学生研究報告会です。12月17日に行われたこの報告会は慶應義塾保険学会後援の学生のみの報告会ですが、現役の保険会社に勤めている方など実務家の方々を含め、約100名が参加しました。

私たちは現在米国で販売されているHSAを日本に導入することで消費者の選択肢拡大を目的とした「日本版HSA保険の提案～貯蓄(医療専用口座)を軸とした保険の可能性～」というテーマで発表を行いました。実務家の方々の視点から質問やコメントを頂き、多くの改善点が見つかり勉強になりました。実務家の方々の前で発表できたことは私たちにとってとても貴重な経験となりました。



二つ目は12月3日4日の両日に渡り愛知学院大学セミナーハウスにて愛知学院大学、福岡大学の3大学で行った合同ジョイントゼミです。「保険」をテーマに研究している3ゼミが報告し、議論を行いました。

私たち岡村ゼミからは2年生と3年生の2チームが発表させて頂きました。2年生は東京学生保険ゼミナールと同様のテーマで発表した際に指摘された点を改善したものを発表しました。3年生は「保険の銀行窓口販売手数料全面開示の提案～マイナス金利の影響を絡めて～」というテーマで研究、発表させて頂きました。





経営学科教授 高松 和幸

私たち高松ゼミは、平成28年度中山間「ふるさと支援隊」活動(埼玉県農林部)を行った。活動の中心となるエリアは埼玉県小川町の腰中地区です。平成25年から活動を行い、本年度で最期の4年目を迎えます。



1年目の活動では、「小川町を知る」「地域の方々と交流を深める」といったことを目標に、まち歩きや腰中地区の方々と清掃活動、お祭りの手伝いなどを行いました。コスモス畑の試験的な作成や、2月の大雪の際には腰中地区で雪かきも行いました。また、「広報活動」「地域資源の発見・エリアマップ作成」「和紙の商品開発」「景観整備・清掃活動」といったプロジェクトチームを立ち上げました。

2年目の活動は、エリアマップを作成し、1年目の活動を継承しました。

3年目の活動は、新たにトウモロコシや大根、白菜の栽培、収穫祭を兼ねた交流会をしました。七夕祭りの手伝いも行い、畑作業では数少ない子供たちとも話すことができました。1月には楮の皮むきの手伝いなどを行いました。

4年目は収穫した野菜を小川町の朝・夕市で販売しました。ただ売っているだけでは経済は活性化しないので、小川町の内外から集客するイベントを定着させ、伝統的特産品に目を向けさせることで購買意欲を高め、活性化につなげていこうと考えました。

このような作業を通して、腰中地区の方々と交流を深めることができました。活動は、次の3つのチームで行なっています。

和紙チーム:和紙を使った商品開発を目標としています。現在は和紙についての知識を深め、和紙を使った商品にはどんなものがあるかといった研究を行なっています。

広報チーム:TwitterやFacebookなどのSNSを活用して、小川町での活動の様子を紹介するほか、お祭りや和紙、観光名所やグルメ情報などを紹介しています。

イベント企画チーム:地域の人々と交流を深めることを目指しています。イベントを企画・提案・実行しています。

この朝・夕市の売上げを次回の農業資金に回すことで、各自の負担を減らす努力をしたことは評価できます。活動している学生を見て、道行く人が「こんなに人がいるなんて昔みたいだ」という声も聴け、ふるさと支援隊活動で地域の輪が広がっていることも確認できました。

小川町での活動は今年で終わりますが、地元からは来年も続けて欲しいという要望もあります。ひとえに学生の活動が地元の人たちに認められたということでしょう。4年間という短い活動ではありましたが、学年が入れ替わっても継続性を持って活動することができ、結果的に小川町の活性化に一石を投じることができたと思います。

活動記録は、逐次、以下の高松ゼミのホームページで開示しています。<http://www2.dokkyo.ac.jp/~msemi011/>



ミャンマー開発援助視察調査 (木原ゼミ3年)



国際環境経済学科 木原 隆司

木原ゼミでは3年時に開発援助視察調査を行っています。今年度は、2016年に政権交代が起きたミャンマーへ木原教授と16名の学生が現地視察を行いました。実際に途上国を目で見て、湿気を感じ、においを嗅ぎ、歩いて触れる途上国と開発協力の感覚には、極めて高い教育効果を得ることが期待できます。私たちは今回、60時間以上に及ぶ事前学習やビザの取得、申請書や同意書の作成等を行い、獨協大学初の海外演習合宿を行うことができました。ミャンマーへの視察期間は2016年9月4日(日)~10日(土)の1週間、首都ヤンゴンに滞在しました。ADBや世界銀行、UNDP、在ミャンマー日本大使館、ヤンゴン証券取引所、ティラワSEZ税関、JICA、を訪問し、ADBやJICAが行っているプロジェクト視察も行いました。

視察調査では、各機関でミャンマーに必要な援助(ガバナンス・インフラ整備や人材育成)の話や、今後の発展の可能性について伺いました。普段のゼミや事前学習で学んだ知識を踏まえ、各機関の働きやプロジェクトの内容について学び、疑問点を質問しました。

英語での説明が多かったのですが、事前学習の成果もあり、問題なく聞き取ることができました。さらに訪問先の方から、質問内容に対して”Good question!”と言っていただけることも多くありました。また私たちは、ミャンマーに1週間滞在する中で、未整備の道路や毎日のように起こる渋滞、市場やスーパーの匂い、野良犬やストリートチルドレン、劣悪なトイレの衛生環境を目の当たりにし、支援の必要性を実感しました。同時にミャンマー人の温厚な人柄にも触れることができ、全員が視察調査に参加してよかったという感想を持ちました。

2016年12月12日から1週間開催されたEarth Week Dokkyoでミャンマー開発援助視察調査報告会を行いました。観客は少なかったですが、各機関で視察内容、質疑応答、感想、今後の展望についてまとめ上げ、内容の濃い報告会でした。ミャンマーへの視察調査に参加していない学生も装飾の手伝いや、報告する内容に対し意見を述べ、3年生全員でミャンマーについて考える良い機会となりました。

(木原ゼミ3年 酒寄静流)



報告会でのポスター



ADBプロジェクト(TVET)視察



チャウッタージーバヤー前にて



ヤンゴン証券取引所にて説明および質疑応答



国際環境経済学科 木原 隆司

2年生の活動

木原ゼミナールでは少人数の班にわかれ開発援助・開発経済に関する論文を輪読し、授業内で発表します。その発表に対し質疑応答が行われ、木原教授自身の経験を踏まえたコメントをいただく形式で授業が進みます。発展途上国や開発援助政策に関して深く学び、国際社会に貢献できる人材になることを目標にしています。

夏の経済数学勉強会

夏休みに2日間かけて経済数学の勉強会を行いました。1日目は中学高校の復習から始まり、さらに新たにラグランジュの未定乗数法を学習することで、今後の学びが円滑になる学習会となりました。2日目の最後に総復習テストを行い自分の力を試すことができました。今後、開発経済学を学習していく上で経済数学の知識は必要不可欠なものと言えます。実際に貧困問題の分析や国際問題の解決策を考えていく上で数学的な観点から考えることは多く、様々な面で今回学習した数学は利用することができるでしょう。多くの人が苦手意識を持ちがちな数学を仲間と共にブラッシュアップすることができた2日間となりました。

ゼミ活動としての現地訪問

木原ゼミナールでは、6月に財務省、11月にJBIC、JICA、世界銀行、米州開発銀行、アフリカ開発銀行を訪問しました。各機関では、専門家の方々から生のお話をお聞きすることができ、また、簡潔明瞭に作られた資料や相手に伝わりやすい話し方などを学ぶことができました。これらの機関は、なかなか訪問する機会がないので、今回の訪問は、これからのゼミ活動において、とてもためになる、貴重な経験となりました。このように、木原ゼミナールでは、机上の勉強だけでなく、実際に訪問し、自分の身で感じ、学ぶことができます。

(木原ゼミ2年 飯野夏美)

4年生の活動

木原ゼミ4年生は、ゼミ活動の総仕上げとしての卒業論文に用いるべく、ゼミの時間前(火曜1限)に「計量経済分析」を学習するとともに、9月には、法政大学(小黑ゼミ)・成城大学(中田ゼミ)とともに二回目となる三大学合同インゼミを開催。木原ゼミからは日本を含むアジアの開発課題としてテロ・教育・医療・ジェンダーについて報告し、インゼミ後の懇親会で交流を深めた。この研究の中でジェンダー問題に焦点を当てたプレゼンを10月の経済学部・プレゼン・コンテストで発表、アイデア賞を戴いた。プレコンの実施運営には、木原ゼミ2年生・3年生が学生スタッフとして参加した。

(ゼミ担当 木原隆司)



夏の経済数学勉強会の復習テスト。平均点は過去最高でした!



財務省の国際会議室で土屋開発機関課長から国際開発金融機関(MDBs)についての説明・質疑



JBIC(国際協力銀行)木村常務から産業ファイナンスを中心に業務説明



変貌する世界の中でのJICA(国際協力機構)の役割について志賀主任研究員からの説明後、JICA研究所の前で。



米州開発銀行の大石所長からの中南米支援についての説明



世界銀行の大森専門官から世界銀行での仕事と職員採用もご紹介



アフリカ開発銀行の横山所長から「希望に満ちた大陸」アフリカの現状と支援の説明



獨協・法政・成城の三大学インター・ゼミナールを終えて

大学キャンパスにおける蜂の観察



経済学部国際環境経済学科 中村 健治

都市の拡大につれて、都市近郊の自然が無くなりつつあります。私のゼミでは都市近郊における人間と自然との関わりを大テーマの一つとしています。過去には、自然は恵みを与えてくれる親のようなものであると同時に戦う相手でもありました。しかし現在は、人間の力が、特に都市域では自然を凌駕し、都市という人工環境が広がっています。このような中では人は自然を忘れがちになります。この現状を把握し、この問題点を探り、そしてあるべき姿を検討することが課題となります。

獨協大学周辺も過去には田んぼが広がっていましたが、現在はその面影はわずかにしかありません。また緑も減り、自然がなくなりつつあります。それでもここ獨協大学のキャンパス内は大学建設時に植林された樹木が大きくなり、かなりの緑が形成されています。ところが、本来いるはずの鳥や虫があまりいません。大学の近くの樹木が少しうっそうとしているところに行くと昼間でも鳥が鳴いていますが、ここ獨協大学内では鳴き声はあまり聞かれませんが、2年前にキャンパスの木に鳥の巣箱を6個かけましたが、一つも入りませんでした。草むらがあれば秋は虫の声でやかましい筈ですが、夜、大学に来てみても鳴き声はするもののかすかなものです。カエルの声もわずかです。

このような大学キャンパス内の自然状態を2年のゼミ生の一グループとともに調べることにしました。手始めとして、蜂を目標としました。写真1、2のような箱に竹筒トラップと呼ばれる竹を並べたものを作ってキャンパスの南西の研究所棟の裏に設置しました。なおこの箱の製作は神近管財にやって頂きました。このような筒にハナバチやドロバチの系統の蜂が花粉やイモムシなどをつめて卵を産みます。夏前に設置し、秋学期の最初の頃に中を確認しました。箱ではなく軒先につるしたトラップも作りましたが、そこには何も入りませんでした。箱のほうには4本ほどの竹筒の先

が泥でふたがされていました。これを取り出し、中を確認したところ、すべてに幼虫が入っていました(写真3)。インターネットや本で調べると、一つの竹筒に複数の小さい部屋が作られると、なっていますが、今の場合は、竹筒1本に幼虫は1匹でした。幼虫は竹筒の奥の節のすぐ手前におり、終齢幼虫と見えて茶色の皮を被っていました。皮をむいてみると、人によっては気持ちが悪く思う人もいると思いますが、きれいな幼虫が入っていました(写真4)。竹筒の内部の様子、幼虫の様子、は同じであることから、同じ種類の蜂、ひょっとすると同じ1匹の蜂が作ったものかもしれません。竹筒は太さにより使う蜂は異なるので、いろいろの種類の蜂が入ってくれることを期待したのですが、そうはなってはいませんでした。それでも数また種類は少ないにしても、まだ蜂が繁殖していることを確かめることができたことは収穫でした。

このような活動は手始めです。今後、ミツバチやクモなどの虫の調査、鳥の調査等キャンパスの自然の調査を広げたいと考えています。また学生アンケートなどにより人々の虫への嫌悪感の調査も行いたいと考えています。過去に鳥についてのアンケート調査をしたことがありますが、学生が鳥に興味を持っていないことが確認されています。

このような大学の自然の調査とともに、大学の周辺の調査も行っています。3年のゼミ生の一グループと屋敷林を持つ旧農家と思われるお宅を訪問し、以前の状態について話を聞いています。突然何うと最初は不審がられますが、獨協大学の者という信用して打ち解けてくれます。大学の信用の高さがわかります。このような活動を通じて、大学周辺の歴史が実態としてわかってきています。



写真1
竹筒トラップ



写真2
竹筒トラップを納めた箱



写真3
竹筒を開けたところ



写真4
竹筒のなかに入っていた幼虫

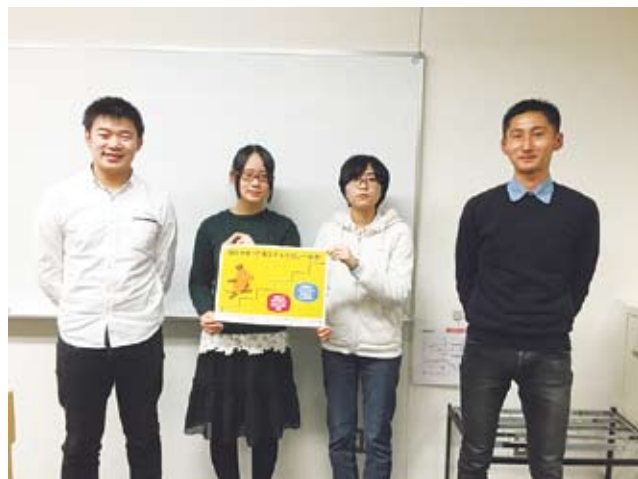
2016年度浜本ゼミ活動報告



国際環境経済学科 浜本 光紹

浜本ゼミの演習Iでは、専門文献や統計資料などの読み方・まとめ方といった基本的なスキルを身につけるとともに、貧困や食料問題などの今日的な課題をテーマに設定して調査・分析を進め、それをまとめて報告するという作業を行いました。また、『環境経済学入門講義』の章末にある演習課題を基にテーマを設定して、環境経済学や環境政策にかかわる調査研究を行っています(写真左上)。ゼミ生には、自然に触れたり農作業を体験したりするといった機会をもってもらいたいと考えています。その一環として、さつまいもの苗の植え付けと収穫の作業を行いました(写真左下)。

演習IIでは、「社会をよりよくするにはどうすればよいか」を統一的なテーマとしながら、自分たちでテーマを設定して調査を企画・実施してもらっています。今年度は、獨協大学での省エネ促進策(階段利用促進ポスターの作成など。写真右上)や日本の観光振興策、草加の地域活性化策、食品ロス削減策、保育所問題という5つのテーマについて調査グループをつくりました。各グループの調査内容と途中経過については、ゼミ以外の学生にも知ってもらうために、10月のゼミ合同相談会の場でスライドの打ち出しを掲示しました(写真右下はその準備作業の際に撮影しました)。各グループの調査結果は2017年1月のゼミで報告されます。





国際環境経済学科教授 藤山 英樹

今年度も充実したゼミ活動を行いました。多くを語るよりもエビデンスとヴィジュアルで!

春 学 期

- 2年生 『ゲーム理論入門』を輪読
- 3年生 英語班(賀茂LSU大教授の前でプレゼン)
行動班(オープンキャンパスで経済実験)
- 2・3年生 デイバート
- 4年生 卒論執筆のための個人報告
- 2・3年生 夏合宿(テキスト輪読・個人報告・デイバート)

秋 学 期

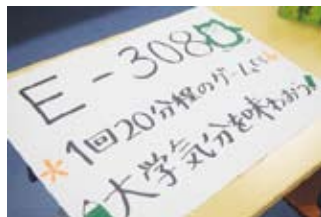
- 2年生 『ゲーム理論入門』を輪読
- 3年生 卒論執筆のためのテーマ探しと個人報告
- 2・3年生 新ゼミ生募集のための活動
法政大学宮崎ゼミと合同デイバート
- 4年生 卒論の執筆



英語でプレゼン!



オープンキャンパス経済実験



夏合宿



法政大学宮崎ゼミ合同デイバート



卒業論文タイトル

- 小豆澤優斗 長時間労働における法的規制
- 石原沙起 映画産業の産業構造における日米比較
- 遠藤 翼 技術革新による3つの環境政策間の利益の比較
- 田口遼太 フリーターとニート問題を解決するには
- 戸張正崇 電子商取引によるリスクと問題点
- 中野 玲 ソーシャルゲームのビジネスモデル

- 八町功大 インターネット広告における行動ターゲティング広告
- 柳澤裕介 音楽市場の衰退の要因の特定
- 吉田 晃 コンパクトシティと草加市のまちづくりについて
- 星野 創 独裁者ゲームとボイスオプション、情報開示
- 富岡 翼

「立山町インターカレッジ
コンペティション2016」にて優秀賞受賞

国際環境経済学科教授 米山 昌幸

11月26日(土)・27日(日)の両日、大学生が富山県立山町の地域活性化策を提案し、競い合う「立山町インターカレッジコンペティション2016」が開催され、全国から9大学13チームが参加した。国際環境経済学科米山昌幸ゼミからAチームとBチームの2チームが参加し、Aチームは大藤美沙(経済学科3年米山ゼミ)、黒川瞳(経済学科3年陰山ゼミ)、稲谷奈摘(国際関係法学科3年鈴木淳一ゼミ)の3名がプレゼンターを務め、「今、ココに生きる立山信仰～立山の魅力再発見の旅～」と題する発表により、立山町独自の歴史・文化である立山信仰を日本遺産に認定し地域活性化を図る提案を行って優秀賞を受賞した。米山ゼミとしては3年連続、大学としては5年連続の入賞となった。

3泊4日のフィールドワーク

立山町は年間約100万人もの観光客が足を運ぶ「立山黒部アルペンルート」を有する国内随一の観光地である。しかし他の市町村が羨むような観光資源を持つ立山町も大きな問題を抱えている。観光客が町民の住む平野部まで降りてこない「素通り観光」や「食の魅力不足」、「にぎわい不足」、「公共交通機関の存続危機」である。このような実態を確かめ立山町の魅力を探るために、A・B両チームメンバー8名は9月20日～23日の3泊4日で立山町を訪れた。滞在中は舟橋町長を始め、立山博物館、商工会、道の駅で多くの方々から町の現状や将来について貴重なお話を伺った。また、室堂平のトレッキングも体験し、立山町の雄大な自然にも触れることができた。そして、Aチームは、立山町の歴史・文化である「立山信仰」の魅力を存分に発揮し観光客増加を目指す提案を、Bチームは町の定住人口の減少と素通り観光に着目し、それを解消するための提案を行うことが立山町の活性化につながるの考えに至った。

「立山信仰」を「日本遺産」に認定し地域活性化を図ることを提案

企画をまとめるにあたってAチームは、「立山信仰」と「日本遺産」という2つのワードに着目した。立山信仰は立山町独自の宗教観で男性は「禪定登山」、女性は「布橋灌頂会」を行うことで極楽往生が約束されるというものであり、町内に立山信仰に関連する建造物や石造が多く残されている。私たちは立山町の20年後、30年後のビジョンとして、立山信仰のゆかりの地である芦峯寺地域を宿坊村落として栄えさせたいと考えた。立山信仰を日本遺産に認定することをきっかけに平野部にある文化財をまわって宿坊に泊まり、そこから立山山頂を目指す観光ルートの確立を目指すことで、町の抱える素通り観光の解消、他の地域に先駆けて国内外に魅力発信、立山町の知名度の向上が期待できる。

この大きなビジョンを達成するため、日本遺産認定に向けた提案を行うことはもちろんのこと、認定後も持続的に観光客を呼び込むための提案も必要であると考えた。そこで、「立山信仰丸ごとモデルコース」と称した立山信仰の聖地を巡るルートの作成と、立山信仰について学び、立山の特産品を味わいながら立山山頂まで行く「禪定登山」イベントの提案も行った。

さらに、私たちは日本遺産認定を実現可能にするため、申請の際に重要となるストーリーの作成を行い、立山博物館学芸員の方

に添削をお願いしたり、申請書類を作成し、文化庁文化財部記念物課の方に見ていただきアドバイスをいただいた。

たくさんの方々の協力と応援

今回のコンペ出場に至るまでに私たちはたくさんの方々の協力と応援を得た。フィールドワークで私たちを快く受け入れてくださった立山町の方々、ゼミの時間に多くの時間を割きアドバイスをしてくれたゼミ生やゼミ以外の学生、先生方、職員の方々の協力がなければ私たちの提案は成り立たなかったであろう。また、メンバー内でも目標やビジョンを共有し、本音で語り合いながら意見交換を行ったことで、本番前の緊張や不安を乗り越えて、自信を持ってプレゼンをすることができた。これらすべてのことが少しでも欠けていたら今回の優秀賞に繋がらなかったと思う。学生生活の中でこのような密で貴重な経験ができたことは、今後社会に出てからも私たちの糧になると確信している。

私たちのプレゼン発表を終えた後、ご協力いただいた町民の方から「発表とてもよかったよ」と声をかけていただくことができた。私たちの提案で立山町が今後も「他の市町村が羨むような町」であり続けるための解決策に繋がれば幸いである。

(文責:大藤美沙)

担当教員からのコメント

今年こそは最優秀賞の奪還を目標に掲げ、ゼミ生以外から新たな視点を持ったメンバーに参加してもらった。このことで立山チームが活性化し、フィールドワーク後には2チームでのエントリーを決めたが、それぞれが刺激し合いながら、素晴らしい企画提案をまとめてくれた。Aチームの日本遺産登録とそれをきっかけとして観光客に町を訪れてもらう企画は、文化庁にもヒアリングをして申請書類まで準備するという完成度の高いものであった。Bチームの「カントーロード立山」と題するサイクリングビジネスの企画もまた実現可能性の高いものであったが、予選を通過できなかったのは非常に残念であった。

立山町コンペでは最優秀には手が届かなかったが、1週間後に行われた群馬県の「日本遺産『かかあ天下ーぐんまの絹物語ー』魅力発信企画学生コンペティション」では、立山チームの全面的なサポートによって最優秀賞を手繰り寄せることができたと思っている。立山チームがここまで成長してくれたことに拍手を送りたい。



「日本遺産『かかあ天下—ぐんまの絹物語—』 魅力発信企画学生コンペティション」にて 「どく太が推す群馬の魅力チーム」が最優秀賞を受賞



国際環境経済学科2年 竹内 美優

2016年12月3日(土)、群馬県の日本遺産の魅力発信企画を学生の視点で提案する「日本遺産『かかあ天下—ぐんまの絹物語—』魅力発信企画学生コンペティション」が群馬県庁において開催された。コンペには7大学10チームが参加し、獨協大学からは交流文化学科井上ゼミチームと、国際環境経済学科米山教授がメンバーを集めて結成した「どく太が推す群馬の魅力チーム」の2チームが参加した。「どく太が推す群馬の魅力チーム」は吉橋茉里奈(法律学科3年山田ゼミ)、岩打愛子(言語文化学科4年浦部ゼミ)、池田真理(総合政策学科3年福永ゼミ)、竹内美優(国際環境経済学科2年陰山ゼミ)の学部学科が異なる4名のメンバーからなるチームで、「かかあ天下の魅力発信ガイドツアー～群馬県におけるインバウンド獲得に向けて～」と題する発表を行い、日本遺産を生かしたインバウンド戦略を提案し、最優秀賞を受賞した。

1泊2日の現地見学会への参加

日本遺産(Japan Heritage)とは地域の歴史的魅力や特色を通じて、日本の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するものである。地域が主体となって文化財群を総合的に整備・活用し、国内外に戦略的に発信することで、地域活性化を図ることを目的としている。日本遺産「かかあ天下—ぐんまの絹物語—」に認定されている文化財は、桐生市、甘楽町、中之条町、片品村に点在していることから、「かかあ天下」ストーリーをうまく発信することが難しい状況にある。そこで群馬県は、学生から日本遺産の魅力を発信するための企画を募る本コンペを開催した。

このコンペでは参加10チームの学生が一堂に、9月1・2日に1泊2日で現地見学会に参加した。事前学習として群馬県庁にて日本遺産についてレクチャーを受け、中之条町と桐生市で構成文化財を見学し、日本遺産をはじめとした群馬の観光資源について学んだ。「かかあ天下」という「強い女性」と恐妻家を揶揄したものというイメージがあるが、実は群馬では「働き者の女性」のことを言うそうだ。上州(群馬県)では、江戸の中頃から絹の生産が盛んになったが、桐生の絹織物は京都の西陣と並んで高級品として名高い。この絹産業の発展に女性の果たした役割は大きく、養蚕・製糸・織物の各工程で女性が活躍した。家事も仕事もこなす妻を夫が「おれのかかあは天下」と呼んだことから、「かかあ天下」として上州名物となった。つまり、日本遺産「かかあ天下—ぐんまの絹物語—」は、たんに絹産業として構成文化財の価値を発信するというだけでなく、女性の権利を守り、地位を向上させて、女性が輝く世界を実現させるという大きなテーマが込められていると知った。

日本遺産を生かしたインバウンド戦略を提案

現地見学会を踏まえて企画を考え、ポスター発表とプレゼンテーション大会に臨んだ。2020年までに日本遺産を増やして国内外へも発信するという文化庁の目標から、私たちのチームは、インバウンドに焦点を当てた。企画立案をするにあたって、外国人への

アンケートを実施したり、中国人留学生を桐生市観光にガイドするなど実証実験にも意欲的に取り組んだ。その結果、まだ群馬を訪れる外国人観光客は少ないものの、地方観光や絹へ興味を持つ外国人が多かったことから、インバウンド市場に大きな可能性を感じ、訪日外国人観光客をターゲットとした企画をまとめた。

企画としては、1)かかあ天下の魅力を発信したい女性を群馬県公式「かかあ」として認定し、認定証を発行すること、2)絹産業の背景知識を身につけた多言語対応の「かかあ天下ガイド」を育成すること、3)そのガイドが「かかあ」と外国人観光客の架け橋となって体験型ツアーを作成することの3つを提案した。群馬県から公式に「かかあ」として認定された女性は絹産業に誇りを持ち、「かかあ天下ガイド」は英語や自分たちの文化を学びながら地元貢献でき、ガイドツアーの作成によって外国人観光客のニーズをつかむことができる。このように、ガイドツアー実現のために「かかあ」「かかあ天下ガイド」「外国人観光客」の3者の“人の関わり”に焦点を当てた提案が高く評価された。

コンペを終えて

9月の現地見学会から12月のコンペ本番まで、インバウンドを軸にして考えてきた。そして最終的に自分たちが一番伝えなかった“人とのつながり”を評価していただけたことを非常に嬉しく思う。メンバー全員がコンペ初参加であり、パワーポイントの作り方やプレゼンのやり方も苦戦した。メンバー全員で集まる時間も十分にとることができなかった。そんな状況でも、メンバー一人ひとりができることを考え、空き時間を利用して、何度も集まり話し合いをした。また、多くの方々にパワーポイントやプレゼンについてご協力・ご指導いただいたことに、大変感謝している。

2020年には東京オリンピックが開催され、さらにインバウンドの増加が期待される。そのインバウンドが、また日本に帰ってきたいと思える“人とのつながり”をこのガイドツアーでつくれたらと願う。その実現に向けて群馬県と一緒にできることは積極的に取り組んでいきたい。メンバー同士協力し合い、周りの方々に助けをもらいながら最優秀賞をいただいたこのコンペでの経験を今後活かしていきたいと思う。





経済学部経営学科4年 黒木 真夢

民謡、ハンバーガー、そして開発経済学

私は2016年夏季五輪が開催されたブラジル・リオデジャネイロを大会期間中に訪れる幸運に恵まれた。アルバイト先である米系ファーストフード店が「オリンピック選手村で働く日本代表クルー」を募集していることを知り、日本人として日本の素晴らしい文化やおもてなしを世界に発信したいという想いから応募した。1次選考では2つの作文課題、2次選考では語学試験、オペレーションスキル試験、グループワーク、個人プレゼンが課された。私は、幼い頃から習っている民謡、高校1年生からの7年間のアルバイトで培ったスキル、そして大学で専攻している開発経済学を三本柱にアピールした。そして、全国12万人のクルーのなかから、日本代表クルー9人の1人に選出された。

刺激に満ちた選手村での勤務

選手村で働いた3日間はとにかく刺激に満ちていた。店舗に配属された従業員約30人のうち7割がブラジル人、残りが中国人、韓国人、日本人であった。東京での事前研修では、店舗では英語でコミュニケーションを取ると聞いていたのだが、実際は殆どの従業員は英語を使えず、トレーニングも全て現地語であるポルトガル語で行われた。初めは、全く理解できない言葉と慣れない環境に緊張と不安ばかり感じていたが、一生懸命伝えようとしてくれるブラジル人クルーの温かさのおかげ次第に緊張や不安は消え、表情やジェスチャーで互いに伝えたいことを理解できるようになった。コミュニケーションは言葉だけではないということ、身を持って学んだ瞬間だ。勤務最終日は志願してカウンターで選手の注文を受ける業務に就いた。接するお客様の国籍は数知れず、知っている限りの言語とできる限りのジェスチャー、そして最高のスマイルで日本のおもてなしを感じていただけるように努めた。アスリートの沢山の笑顔と沢山の「ありがとう」は、一生の宝物となった。

ゼミでの学びからリオで発見したこと

私は2年次からゼミで開発経済学を専攻しており、途上国の経済状況や今後の発展の在り方を理論と実践の双方から学んできた。その中でも、途上国の経済には必ず光と影があるということに私は特に興味を持った。

2年次の春学期、初めてのレポートのテーマは「フィリピン経済の光と影」、高度経済成長とその裏に隠れている経済格差の拡大に焦点を当て、現地に足を運び自らの目で確かめた上で完成させた。この経験から、ブラジル経済にも光と影が存在しているのか、現地ですでに得ることができない情報を入手したいと考えた。そして、ブラジルで「2つの顔」を目にしたのである。

成田からの30時間近いフライトを終え、リオに足を踏み入れると、空港内はテレビで報道されていた治安の悪さを忘れてしまう程、多くの観光客で賑わっていた。空港からホテルへ移動するバスからは、五輪開催のために再開されたお洒落な街並みと五輪関連施設を見ることができた。しかし、そのような近代的な風景はほんの一部に過ぎず、すぐ隣に目を移すと2年前にフィリピンで目にしたスラム街と同様の光景が広がっていた。また市内観光中に、靴が片方しかないと靴をくれと建物の中に入れてくれる女性と遭遇した。事前にメディアでブラジルの経済格差や財政難を耳にしていたが、実際に訪れて、想像以上の光景に衝撃を受けた。「五輪ではなく貧困層の支援にお金を使え」とデモをする人々の気持ちが理解できた気がした。短い滞在ではあったが、「光のある所には必ず影がある」ことを改めて学んだ。



ホテルの部屋から撮影したリオ市街。ビル街の向こう側はスラム

CSRを学んだ私がCSR活動の一員になる

私が所属する高安健一ゼミでは、3年次に取り組みたいテーマを学生が自由に選定し、チーム毎に活動を行う。私は企業の社会的責任(CSR)に着目し、企業のCSR活動の視点から貧困問題にアプローチするアイデアを考え、国際協力NGOでプレゼンを行った。チーム活動の最中、開発経済学の講義でSONNYの吉村司さんから、同社がCSR活動の一つとして行ったサッカーワールドカップで、アフリカのパブリックビューイングに携わった経験を伺った。今回私が参加したリオ五輪での活動も米系ファーストフード店のCSR活動の一環に他ならない。双方に共通しているのは、CSR活動とスポーツのリンクである。私はリオ滞在中にいくつか試合を観戦したが、特に卓球男子団体決勝戦(日本対中国)では一生忘れられない熱戦を目にした。メダルだけでなく、人生までもかけるガチンコ対決を企業が支援をする。この意味を、身をもって体感した瞬間だ。人々が感動するコンテンツでないと、CSR活動としての広がり生まれえない。この広がりを生むことができるスポーツが、世界に展開できる可能性を持つコンテンツである。



卓球男子団体で銀メダルを獲得した直後の水谷選手と筆者(中央)

後輩へのメッセージ

私は2歳から民謡を習い始め、15歳で米系ファーストフード店でアルバイトをすることを選び、18歳から開発経済学を学んできた。これら3つは何の関係性も無いように思える。私自身も関係性など考えずに継続してきた。しかし今回、日本代表クルーに選出され、リオで数え切れない貴重な経験をする事ができたのは、これら3つの要素があったからこそである。「継続は力なり」というのは、まさにこの事を指すのだろう。そしてもう一つ、私は今回の活動を通じて、自ら行動を起こして現地に飛び込んでこそできる学びや経験が沢山あることを改めて実感した。1人でも多くの獨協大生が、草加市学園町を飛び出して自らの力で貴重な経験を掴みに行ってください。

獨協大学で教えて48年



経済学部経営学科 立田 ルミ

獨協大学が開学して5年後の4月に、電子計算機室の助手として採用された私は、なんと48年間も学生たちと付き合ってきたことになります。獨協大学にギネスブックがあれば、名前が掲載されたかも知れません。獨協大学に勤めることになったきっかけは、母校の津田塾大学数学科のゼミの教授から推薦を受けたからです。大学では、授業料を払っている(親がですけど)のだから、単位はできるだけ取得しようと思い、語学はドイツ語、フランス語を受け、数学のあらゆる科目と教職科目を受講しました。寮が大学内にありましたので、通学時間は1分ほどでした。大阪育ちの私は、「がめついやつ」だったと思います。部活は室内楽管弦楽団(バイオリン)で部長をやっており、一橋大学と合同でオーケストラもやっていたので、こちらも忙しかったです。

獨協大学は1963年12月に電子計算機を導入することが決まっていたようで、数学を専攻している助手を採用することになったそうです。9月の面接後すぐにアルバイトに来て欲しいと言われ、後期(秋学期)の授業を2科目やめることにして、毎週1回獨協大学に通いました。当時、コンピュータとは呼ばず、電子計算機と呼んでいましたが、本物をさわったことのある人は少なかった時代です。私は大学で数学科にいましたので、電子計算機が入学当初に導入されていて、プログラミング言語(アセンブリ言語)の講義と実習の経験がありました。入力も出力も紙テープの時代です。当時は国産機を推奨していましたが、IBM1130という電子計算機を導入予定ということで、同じ機種を使っている大学に見学に行っているいろいろと教えてもらいました。

とにかく一番下っ端で助手ですから、上の先生が言われたことは何でも「はい、わかりました」と言って受け入れざるを得なかったのです。同時に助手として入った3人のうち1人は、2年ほどしてやめて企業に就職しました。私は大学院に行かせてもらうという約束で、津田塾大学大学院(理学研究科)に入学もしていましたので、続けることにしました。当時は入試業務のコンピュータ化で徹夜業務もあり(教員がシステム開発を行っていた)、お酒は飲めないのに遅くまで飲み会の付き合いもありました。また、電子計算機の補助金を文部省から獲得するために、手書きの書類を何枚も書いたものです。勿論、ワープロというソフトウェアはありません。その上、IBMの計算機は日本語が使えませんので、プログラムのエラー修正をするには、英文の

マニュアルを読むしか方法はありませんでした。

授業の助手は、学生たちのプログラム(FORTRAN)のエラーを見つけてあげるのが主な仕事でした。英語のエラーメッセージが出されますので、それを日本語に翻訳するのではなく、学生たちが間違えそうなエラーの一覧表を作成しました。当時一番楽しかったのは、授業後の数学とプログラミングの勉強会です。教える私はボランティア活動で、夕方から集まってくる学生たちの単位は出ません。学生たちには難しい問題を出し、出来た学生にはラーメンを奢るというおまけもありました。また、情報処理試験講座や土曜日午後に行った一般市民向けのコンピュータ講座もボランティアでやりました。

27歳で専任講師になってからは、何故かすぐにはゼミを持たせてもらえませんでした。専任講師ですぐにゼミを持っていれば、立田ゼミ43期生を迎えている筈なのですが。当時上司の先生とお話しをして、「何か希望がありますか」と聞かれましたので、「ゼミを持ちたいです。」と答えて専任講師4年目にやっとゼミを持つことができました。当時、ゼミは3,4年生が必修科目でした。

ゼミを持った時、毎年の1年間の行事を決めました。これらの行事は39期生を持っている現在も続けて行っております。まず、ゼミ合宿は大学から推奨されていたので、春休みと夏休みに行くことにしました。ゼミ合宿を行う前に、3日間の勉強会(9時から17時まで)を行い、その成果を合宿で発表していただくことにしました。最近では、個人の発表だけでなく、グループで作成した映像の発表もあります。合宿はお金がかかりますので、「お金のかかるゼミ」と言われています。しかし、ゼミ合宿を行うことでゼミ生の仲間意識が高まりますので、この制度があつてよかったと思います。子ども3人が小さい頃は子連れ合宿で、ゼミ生に随分可愛がってもらいました。冬合宿はスキーやスノーボードを楽しむ時間もあります。スキー1級を持っている学生にスキーを教えてもらったので、随分得をしています。大学祭には自分たちで作成したプログラムを発表したり、模擬店を出したりしました。

また、卒業論文の概要集を作成し、卒論発表会を12月に行うことにしました。ゼミ生の人数が多いですから、発表は朝9時から17時までかかります。その後、クリスマスパーティを行うことにして、卒論優秀賞を投票で決めています。卒論を冊子にするにはお金がかかりますので、概要集だけにしてはいたのですが、1997年からは卒論を

CDに自分たちで焼き付けて、ラベルも自分たちで作りました。現在は大学にカラープリンタがありますので、表紙だけをカラーにして概要集を無料で作成しています。また卒業式の後、自宅での卒業パーティーを行っていました。家を建てる時に、大勢の人が集まるようにしておいたのです。3年生が朝からパーティーの食事を作り、卒業式後、4年生が自宅に来てそれらを食べるのです。ケータリングなどという洒落たものがない時代でしたので、手作りパーティーでした。2006年まではこのような手作りパーティーを続けていましたが、3年生が作るのが大変でやりたくないと言うので、大学でのケータリング・パーティーに変えました。手作りパーティーをするには、自宅の掃除などとても大変だったのですが、時代を反映して、お金を出してのパーティーに切り替えました。楽にはなったのですが、人間関係が希薄になった気がします。

大学から支給される個人研究費は学会出張などでいつも夏前にはなくなり、海外出張は自費で行くことが多かったのです。しかし、幸いにも家計の財布は私に任されていたので、誰にも文句を言われなくて、子どもたちを夫に預けて海外発表に行きました。同業者である(専門は異なる)夫は、それまで一人で何度も海外に出張していましたが、私が海外出張するのに文句は言えませんでした。

1992年に、獨協大学からイリノイ大学に3か月海外研修(客員研究員)に行く機会(他に希望者がなかったので声がかかった)を得たことが、研究生活の上でとても大きいものとなっています。1992年は、ちょうどインターネットを簡単に利用できるブラウザ(MOSAIC)がイリノイ大学で開発中であり、その利用方法を研究しているところでした。研究会が学内のあちこちで行われていて、毎日が楽しくて楽しくて、あっという間に3か月が過ぎた程です。イリノイ大学での研究生活にすっかり味をしめ、その半年後、1年半の間イリノイ大学での海外研修を初めて自分で申し出て、客員教授として出かけることになりました。しかし、長期の海外研修なので、末の子ども(小学校3年生)をひとりにする訳にはゆかず、子連れ研究留学になりました。当時、子どもは海外に行くことをとても嫌がっており、国内ならどこでも転校すると言っていました。連れてゆくより方法がありませんでした。もし子どもが英語に対応できなかつたら、途中で帰国せざるを得ないと覚悟の上での留学でした。ゼミの学生たちには、「先生

がアメリカに行ってしまったら、僕たち・私たちはどうなるの」と言われていたもので、まさに「清水の舞台から飛び降りる」という気持ちでした。子どもはアルファベットも習っておらず、いきなりアメリカで教育を受けたので、4通りのaの発音は完璧で、lとrの使い分けもできて羨ましい限りです。

海外研修中にイリノイ大学の先生とイリノイ大学から特別研究費をもらって共同研究をし、その研究成果を基にあちらこちらの学会で研究発表をすることで、学会の役員にも任命されました。また、メディア教育開発センター(現在は放送大学に吸収)の研究員にも応募し、その後は客員教授として海外調査にも参加しました。それまでは研究費を家計から捻出していましたが、科研費をはじめ、他の研究費もいただけるようになりました。

海外研究発表と調査は、アメリカ各地、ロシア、オーストラリア、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、ギリシャ、ポーランド、ポルトガル、スウェーデン、ラトビア、ニュージーランド、中国、台湾、香港、マレーシア、ベトナムなど、数えてみると40か所以上行ったことになります。そこでいろいろな大学の先生と知り合いになり、学会での役員も引き受けることになりました。

48年間の教員生活を文字にまとめるのは難しいのですが、授業やゼミを1度も病気で休講したことがないのと子どもの病気を理由に休講したことがないのが、私の自慢です。子どもが健康で病気をあまりしなかったことと、私が健康であったことに感謝しています。また、私がアメリカに行くことになって、何人かの学生が海外にきました。また、研究費を獲得して学生たちに手伝ってもらおうと学生の論文のレベルが上がり、大学院に行く学生も多くなりました。また、大学の役職をすることになり、入学式や卒業式に壇上に上がると、学生たちが喜んでくれました。学生とともに教員生活を長く続けることが出来、本当に学生たちに感謝しております。

5年間の助手時代に得たものが、その後随分役立ったと今では思えます。みなさんも、大学時代はとにかく大学にある設備や機会をふんだんに使い、いろいろな事を身につけ、職を得たら少なくとも5年は我慢し、自分の仕事を大事にすることをお勧めします。

職場のストレス—退職にあたって、学生のみなさんに



経済学科 中野 隆史

メンタルヘルスという言葉は聞いたことがあるけれど、今のところ自分には関係ないと考えている人が多いと思います。しかし、講義や演習でみなさんに聞いてみると、中学や高校の友人や同級生にうつ病や不登校などメンタルヘルス不調で学校を休んだ人がいる、父親がうつ病で会社を休んでいたことがあるが今は元気に仕事をしている、お祖母ちゃんが認知症であるなど、身近にメンタルヘルスの問題を経験している人が結構います。

メンタルヘルスに関して、みなさんにぜひ知っておいて欲しいことをいくつか書いてみることにしました。

みなさんがこれから社会に出て仕事をしていく上で、心身の健康が基盤になります。自分の健康は自分で守らなければなりません。

厚生労働省が5年ごとに行っている労働者健康状態調査の最近の結果によると職業生活におけるストレス等の状況として、労働者のうち仕事や職業生活に関する強い不安、悩み、ストレスを感じている人は60.9%に及びます。そのストレスの内容は、職場の人間関係41.3%、仕事の質33.1%、仕事の量30.3%、ついで会社の将来性、老後・定年後、仕事への適性となっています。

社会人として生活していく上で、ストレスはつきものです。ストレスとうまく付き合う自分なりの方法を身につけることができれば、一生にわたって役に立ちます。そのためには、まず自分のストレス状態をよく知ることが大切で、これに気付かないことが一番危険です。

昨年の労働安全衛生法(法)の改正で、事業主は年に1回、従業員のストレスチェックを行うことが義務づけられました。この制度はメンタルヘルス不調の未然予防(1次予防)と職場環境の改善を目的としています。私たちはこれを受検して自分のストレスの状態に気づき、対処法を工夫し、必要があれば自発的相談ができるようセルフケアについての理解を深める必要があります。

自分なりのストレス発散法を持つことは大事です。お喋り、歌をうたう、音楽を聴く、休日に趣味・スポーツで発散する、旅行・温泉に行くなどさまざまな方法が考えられますが、どれが有効かは人それぞれで違います。いろいろ試して自分に合ったストレス発散法をみつけて下さい。旅行などはいつでもできるわけではないので、ストレス発散の方法を複数持っていると良いです。

自分をサポートしてくれる人がいるとストレスはかなり軽減します。話を聞いてもらうだけで安心できる人、本当の気持ちを打ち明けることができる人、相談できる人がいればストレスはずい分軽くなります。しかし、実際に相談できている人は案外少数です。人に相談するのは自分が弱いからだと思っている人も多いのですが、そうではありません。相談することは課題を第三者の目からも見ることになり、問題解決の選択肢を増やすことです。相談できる人は他者のサポートを得る力を持っている強い人です。相談できる相手を増やしていくこと、複数の相談相手を持つことを心がけて下さい。

最後に、定期健康診断とがん検診についてです。職場では年に1回(仕事の内容によっては年2回)定期健診を行うことが法で定められています。自分の健康を自分で守るために、必ず毎年受診してください。今、日本では生涯に2人に1人が、がんになります。がん検診はまだ症状のない人を検査してがんを早期に発見し、死亡率を減らすのが目的です。そのために厚労省が現在推奨しているがん検診は、胃がん、大腸がん、肺がん(いずれも40歳以上)、乳がん(30歳以上)、子宮がん(20歳以上)の5つです。がん検診を定期健診と一緒にを行う職場も多いので、ぜひ毎年受検することをお勧めします。

経済学教育について思うこと



経済学部経済学科准教授 熊本 尚雄

今年度から本学部准教授として着任致しました。

講義では2年次以上の学生を対象とした科目のほか、1年次の学生を対象とした必修科目も担当しています。前任校では2年次以上の学生を対象とした専門科目のみを担当し、経済学の基礎知識をもたないことを前提とした講義を担当したことはありませんでした。

教員歴13年目にしてはじめて経験するこのことに際し、以下の点に留意して講義をするように心がけています。

例えば、講義トピックの1つに「国民所得の決定メカニズム」に関するものがあります。これは、文字通り、国民所得がいかんして決定されるかを明らかにする理論であり、国民所得が低迷したり、高い失業率が発生したりするのは、総需要(有効需要)の低迷が原因であり、有効需要を増加させることが失業や遊休設備の解消に役立つと主張したケインズの「有効需要の原理」に基づくものです。また、この理論は来年度以降の進級後に多くの学生が履修することになるであろう専門科目(例えば、マクロ経済学)の修得には必要不可欠な予備知識となり、大変重要な位置づけとなる内容でもあります。

ただし、いきなり専門的な理論内容を解説しても、学生は果たしてこの理論がどのような局面で有効なのか、理解できずにさほど興味を持たない可能性があります。そのため、まず何よりも学生に好奇心を与えることに配慮する必要があると考えています。講義では、専門的な内容の解説に入る前に、関連する新聞記事などを先に提示し、今から学ぼうとしている理論を用いると、例えばこれらの記事に書かれている設備投資が増加した場合に、経済全体にどのような影響を及ぼすのかが理解できるのだということを説明するようにしています。

これは、経済理論と現実問題との橋渡しの役割を担うものであり、これから本格的に経済学を学ぼうとする学生にとっては極めて重要なことであります。無論、学生の関心は十人十色でしょうが、新聞などから適切かつ日常的なカレントトピックスを選び出し、それを論点とし、そこで起こっている問題を学生がこれから学習する経済学のツールで斬ってみせることが重要だと思います。

また、講義では単に知識を伝授するだけに終わらず、実際に学生がこの理論を使いこなすことができるかどうか、学生自身が考える、思考力を鍛錬することにも時間を割いています。ここでは、学生自身が、先に提示した記事にならない、設備投資が増加した場合、または減少した場合に経済全体にどのような影響があるのかを、実際に計算することで、いままさに学習したツールを用いて経済問題を解くことを体感させています。

講義には、知識を伝達すべきことと、学生自身が考えることという、どちらも欠くことのできない重要な二つの側面が含まれており、これらのバランスの取れた講義を展開していきたいと強く思っています。

経済学部系の窓口から



獨協大学教務課経済学部係 篠原 幸喜

経済学部生のみなさん、こんにちは。2016年5月から教務課経済学部係の担当となった篠原幸喜です。よろしくお願ひします。

実は私、みなさんの先輩です。獨協大学経済学部に入学したのは1996年。体育会サッカー部に所属し、埼玉県1部リーグで2度優勝するなど、サッカー中心の大学生活を過ごしました。学業面では、2年間必修だった演習に集中。Windows95が流行した直後だったので、コンピューターとインターネットに興味を持ち「インターネットの教育利用」というテーマの立田ゼミで学びます。そこで教育分野におけるインターネットの可能性に触れ、さらに勉学を続けるため大学院へ進学。2年間学んだ後、2002年4月に獨協大学へ就職しました。就職に関してゼミ活動が役立ったことは言うまでもありません。その頃の大学は6棟が最新の建物で、グラウンドは人工芝ではなく土で、天野貞祐記念館の場所に2階建ての学食がありました。大学の様子は常に変化し続けていますが、今も入校当時の「獨協大学の教育活動に貢献したい」という、私の思いは変わっていません。

さて、教務課に配属されたばかりの私から、経済学部のみなさんに1つアドバイスがあります。それは、履修相談の待ち時間の使い方です。履修相談で質問されることの大半は、既に配られている「時間割表」や「履修の手引」に答えが書いてあります。気軽に質問できる環境も大切ですが、みなさんは限られた時間のなかで履修登録しなければなりません。手元の資料をちょっと確認するだけで解決する、そんなことのために時間を使ってしまうのは、もったいない気になりますか？すべての資料を熟読するのは難しいかもしれませんが、時間割表の最後のページにある「履修登録QA」を一読するだけでも、もっとスムーズに履修登録できるようになると思います。もちろん我々スタッフももっとわかりやすく読みやすい資料を作るように努力していきますので、意見があれば、窓口にお寄せください。

最後に、みなさんが素敵な大学生活を過ごせるようにスタッフ全員でサポートしていければと思っています。がんばってください。

獨協大学教務課経済学部係 海方 悠里

経済学部生の皆さんこんにちは。教務課経済学部係の海方悠里と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

私は2015年3月に本学外国語学部英語学科を卒業し、同年4月より職員として入校いたしました。そして昨年の5月から教務課経済学部係の職員として働いています。

教務課では「挨拶・丁寧・正確」の窓口スローガンを掲げ、皆さんが利用しやすい窓口対応を心がけています。不明な点や不安な事柄がございましたら、気軽にお立ち寄りください。

さて、ここでは獨協大学の卒業生として、そして本学職員としてまた一社会人として、自分のこれまでの経験も踏まえ現役学生のみなさんにお伝えしたいことがあります。充実した学生生活を送るため、少しでも参考になれば幸いです。

お伝えしたいこととはずばり「大学生のうちに何でも経験してほしい」ということです。大学生の間は、人生の中で自由に使える時間が最も多くある時期だと思います。それはみなさんに平等ですが、その過ごし方で将来が変わってくるといっても過言ではありません。また、

社会に出る一歩手前で自分自身の見つめ直し、いろいろな悩みや壁に出会う時でもあると思います。何をしたらいいか、何がしたいのかわからないという悩みを抱えている学生も多くいるのではないのでしょうか。そんな時、自分1人で答えが出るまで考えるのもよいですが、視野を広げ、少しでも興味のあることを経験してみてください。それはもちろん履修する授業しかりです。いろんな場所に行き、様々な人と出会い、異なる価値観に触れ、そこで初めて自分自身を知ることができるかと思います。そしてちょっとしたきっかけで、自信を持てるということを実感できるはずですよ。どのように動き出せばいいかわからない時は、是非みなさんの周りにはいる職員に話しかけてみてください。本学職員一丸となって皆さんをサポートいたします。

4年間という限られた大学生活の中で経験したことを通して、本学卒業生として自信をもって社会へ羽ばたいていただけたらと思います。皆さんの大学生活が有意義なものになるよう教務課一同応援しています。改めましてどうぞよろしくお願ひいたします。

経済学部教員の 2016年度の研究業績

経済学部 に在籍している各教員の「教員紹介」および「教員業績紹介」が大学ホームページに掲載されています。ここでは、すべての教員ではありませんが、各教員の2016年度の新しい研究業績を①著書、②論文、③翻訳・書評・その他、④学会・研究会報告、⑤社会貢献、の5つの項目ごとに掲載します。

経済学科



市原 博

- ②「工業高校卒業者のキャリアと職務能力認識」『法政大学大原社会問題研究所雑誌』689号 2016年3月
- ②"The Human Resource Development, Occupational/Status-linked Personnel Management Practices and Engineers in Japanese Corporations before the Second World War" in THE EAST ASIAN JOURNAL OF BRITISH HISTORY, Vol. 5 March 2016
- ④「人文・社会科学分野のオーラルヒストリー、成果と課題(その1)」電気学会全国大会 1916年3月16日 東北大学

倉橋 透

- ②「首都圏における「その他の空き家」についての一考察」、国土交通省国土交通政策研究所、PRI Review 第63号～2017年冬季～、forthcoming
- ⑤住宅金融支援機構事業運営審議委員会委員
- ⑤東京都地価動向調査委員会委員
- ⑤神奈川県地価調査委員会委員

熊本 尚雄

- ②"Currency Substitution and Monetary Policy Effects: The Case of Latin American Countries", (共著) International Journal of Economics and Finance, Vol.9, No.2, pp.32-45 (2017.2)

黒木 亮

- ③(書評)『ケインズ対フランク・ナイト——経済学の巨人は「不確実性」の時代をどう捉えたのか——』酒井泰弘(ミネルヴァ書房)、『経済学史研究』58巻2号、66-68頁

塩田 尚樹

- ③「従来型 IS-LM モデルにおける環境制約の考慮例と改良案」、『経済教育学会第32回全国大会研究報告要旨集』pp.56-57, <http://ecoedu.jp/conf/yousisyuu2016.pdf>

- ④「従来型 IS-LM モデルにおける環境制約の考慮例と改良案」, 経済教育学会第32回全国大会, 9月11日, 流通科学大学
- ⑤経済教育学会 理事
- ⑤経済教育学会学術誌『経済教育』編集委員
- ⑤草加市下水道事業運営審議会 会長
- ⑤草加市立病院運営審議会 会長
- ⑤草加市社会資本整備総合交付金評価委員会 委員長

須藤 時仁

- ②「日本経済は賃金の上方硬直性に陥っているのか?—賃金粘着モデルによる理論的考察—」、『獨協経済』第99号、2016年12月、17-19頁
- ③日本証券経済研究所編『新外国証券関係法令集 イギリス 2012年金融サービス法』翻訳、パート2(第6条～第15条)とスケジュール5、2016年5月、日本証券経済研究所
- ③証券経済学会・日本証券経済研究所編『証券事典』、第1編第2章Ⅱ「政府」(野村容康氏と分担執筆)、第2編第1章I「日本の金融構造と証券市場」、2017年3月(刊行予定)、金融財政事情研究会
- ⑤公益財団法人日本証券奨学財団、研究調査助成選定委員
- ⑤地域ビジネススクール草加「草加商工会議所コラボ獨協大学」, 「グローバルな視点から検証する、中小企業の経済環境」講師、2017年1月21日(於 草加商工会議所会館)
- ⑤現代の理論社会フォーラム経済分析研究会、シンポジウム「日本経済、この先のゆくえ」(仮題)パネラー、2017年3月11日(於 日本教育会館)

高安 健一

- ①分担執筆(2016)『シンガポールを知るための65章(第4版)』明石書店
- ②「バングラデシュの経済発展と金融改革」『国際金融』2016年9月1日号、36-41頁
- ③書評:三重野文晴著『金融システム改革と東南アジア—長期趨勢と企業金融の実証分析』アジア政経学会『アジア研究』2017年4月号予定
- ③寄稿:『埼玉新聞』「東南アジア経済の活力を地域経済に取り込むには」2016年12月6日
- ⑤グローバルフェスタ JAPAN 2016 参加
- ⑤第6回 CSR 構想インターゼミナール参加
- ⑤意見交換(春日部市役所、財務省財務総合政策研究所、千代田化工建設株式会社)
- ⑤国際協力 NGO ジョイセフ (JOICEF) との連携企画
- ⑤ゼミ活動紹介 (NHK 総合テレビ「ひるまえほっと」) 2016年6月30日放送)

野村 容康

- ②論文「歴史的に見た日本の税収構造—なぜ不公平な税体系になってしまったのか—」『生活協同組合研究』2016年6月号 (vol.485)、12-20頁
- ②論文「フィンランドにおける二元的所得税体系の再分配効果—地方所得税に注目して—」『獨協経済』第98号、83-95頁
- ②論文「フィンランドにおける2005年資本所得税改革と法人投資」証券税制研究会編『リスクと税制』日本証券経済研究所、69-94頁
- ④報告「フィンランドにおける2005年資本所得税改革の効果」、日本財政学会(京都産業大学)、2016年10月22日

本田 浩邦

- ①『アメリカの資本蓄積と社会保障』日本評論社、2016年
- ②「現代尊農論 ベーシックインカムによる地方再生」『緑の風』多摩住民自治研究所、2016年4月、pp. 24-30.
- ②「フランク・ロイド・ライトの都市構想 小規模都市と農業の分散的融合」『緑の風』多摩住民自治研究所、2016年5月、pp. 10-14.
- ②「右派リベラルへの幻滅が生み出したポピュリズムー 2016年アメリカ大統領選挙結果をみる」『緑の風』多摩住民自治研究所、2016年12月号、pp. 1-5.
- ②「とんでもない『利益相反』政権が誕生する」『週刊金曜日』(1120号、2017年1月20日、pp. 26-27.

森永 卓郎

- ①「雇用破壊 三本の毒矢は放たれた」単著(角川新書) 2016/3/10
10年後に失敗しない 未来予想図 監修(神宮館)2016/5/20
- ③週刊ポスト、日刊ゲンダイ、AERA、電気新聞で書評を連載

経営学科



有吉 秀樹

- ③「アンチテーゼは両刃の剣」『県内大学発 経世済民』第332回 埼玉新聞(2016年4月5日)
- ⑤「マーケティングの考え方は人を幸せにする」(主催:市川市倫理法人会、於:市川グランドホテル、2016年4月7日)
- ⑤「マーケティングを通してアクトを考える」(国際ロータリー2770地区 ローターアクト第27回年次大会記念講演、於:TKP大宮駅西口カンファレンスセンター、2016年5月22日)
- ⑤「マーケティングと会員増強」(主催:市川南ロータリークラブ、於:ブライトンホテル東京ベイ、2016年9月28日)
- ⑤「中小企業のマーケティング」(主催:草加市商工会議所、於:草加市商工会議所会館会議室、2017年2月25日)

飯島 優雅

- ②飯島優雅・渡辺敦子・マスワナ紗矢子・渡寛法・堀晋也・高橋幸・金丸敏幸・田地野彰・寺内一(2017). 日本の大学における学術英語カリキュラムの現状と課題: 実態調査結果を踏まえて. 『京都大学高等教育研究』第22号
- ④Watanabe, A., Iijima, Y., Hori, S., Watari, S., and Terauchi, H. (2016.7). Exploring the EAP Curriculum in EFL and ESL Contexts. The 14th Asia TEFL International Conference (Vladivostok)
- ④飯島優雅・堀江郁美(2016.8). テキスト分析システムを活用した大学英語ライティング教科書の語彙分析. ポスター発表. 外国語教育メディア学会第56回全国研究大会(東京).
- ④Iijima, Y., Mitani, H., and Okada, K. (2016.8). Bridging EGAP and ESAP: A Case of a Project-based Course at Dokkyo University. Poster presentation. JACET 43rd Summer Seminar (Kyoto)
- ④Hori, S. Watari, H. and Iijima, Y. (2016.9). EAP Curricula in

Japanese Universities: Analysis from a Global Assessment Perspective. JACET 55th International Convention (Sapporo).

- ⑤大学英語教育学会 EAP研究会代表

井上 靖代

- ①『図書館ハンドブック 第6版補訂2版』(共著) 日本図書館協会編・発行 2016年9月
- ②YA サービスの現状-全国調査報告(2)-(共著、井上靖代ほか3名)『図書館界』Vol.68 No.2(通巻389号)134-140頁
- ②米国の学校図書館の現状と動向(単著)『学校図書館』第786号(2016年4月号)37-41頁
- ③アメリカの専門職司書とは-図書館員の職務状況(単著)『みんなの図書館』通巻477号(2017年1月号)66-77頁
- ③IFLA(国際図書館連盟)大会@オハイオ州コロンバス報告(単著)『みんなの図書館』通巻475号(2016年11月号)72-76頁
- ③ボストンパブリックライブラリーは変身中(単著)『みんなの図書館』通巻471号(2016年7月号)81-87頁
- ③好奇心を育む図書館の魅力(インタビュー記事)「民主青年新聞」2016年8月1日付
- ③知的自由の再検証(2015年度同志社大学司書課程特別講演会記録)(通訳・翻訳) P.スタージェス(ラフバラ大学図書館情報学大学院名誉教授)述・著 『同志社大学図書館学年報』第41号(2016年3月)5-16頁
- ④図書館司書専門職の雇用・研修-米国の場合を中心として(単) 日本図書館協会第102回全国図書館大会第11分科会(2016年10月16日) 於:青山学院大学
- ④「学校司書」養成をめぐる動き(単) 近畿地区図書館学科協議会年次大会(2016年9月2日) 於:同志社大学
- ④Library Services for Young Adult now in Japan(単) International Federation of Library Associations and Institutions(国際図書館連盟) World Library and Information Congress, 82nd IFLA General Conference and Assembly, 13-19 August 2016, Columbus, Ohio, USA.
- ④Right to be Forgotten - The conflict between access and privacy(単) Asia Pacific Regional Internet Governance Forum (APrIGF) (2016年7月27日) 於: NTUH International Convention Center(台北市、台北医学大学国際会議場) 主催:IGF 共催:台北交通コミュニケーション省(The Ministry of Transportation and Communications (MOTC))
- ⑤(講演)「いつどのような本と出会うか-中高生世代への本の届け方を考える-」新潟県教育委員会主催事業「子ども読書レベルアップ研修」於:金井コミュニティセンター(2016年9月21日)、於:燕市吉田公民館/図書館(同9月20日)、於:聖籠町立図書館(同9月13日)、於:直江津学びの交流館(直江津市立図書館)(同9月12日)
- ⑤(講演)「草加市子育て講座 子どものかかわり方と絵本のちから」獨協大学地域と子どもリーガルサービスセンター・草加市(子育て支援センター)共催(2016年7月14日) 於:獨協大学
- ⑤文部科学省学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議学校司書の資格・養成等に関する作業部会委員
- ⑤IFLA(国際図書館連盟)Library Theory and Research(図書館理論と研究)委員会事務局長、Free Access to Information and Free Expressions(情報への自由なアクセスと表現の自由)日本代表委員
- ⑤日本図書館協会図書館の自由委員会委員
- ⑤大阪府図書館協議会委員

大坪 史治

- ①『環境学への誘い』創成社,2016年9月(第16章「環境会計と環境情報」),共著
- ②「CSR経営とKPIの見方」2015年・2016年度日本社会関連会計学会スタディグループ研究(第6章「ESG情報に求められる会計の役割」担当),pp29-40,2016年
- ②「非財務報告の新たな展開—二つの統合思考とわが国企業実践における基礎調査—」『獨協経済』第98号,pp125-134,2016年
- ③湯田雅夫、大坪史治「講義ノート2016年度版」(社会会計論),2016年
- ④「ESG情報に求められる会計の役割」日本社会関連会計学会全国大会,2016年10月29日(於:愛知大学)
- ④「非財務報告書の類型化に関する試み」日本セキュリティ・マネジメント学会全国大会,2016年6月26日(於:工学院大学)
- ④「情報開示をめぐる二つの統合思考」日本セキュリティ・マネジメント学会(環境マネジメント研究会),2016年6月7日(於:日本環境認証機構本社)

黒川 文子

- ②「EUの環境税、炭素税と自動車産業のCO2排出量抑制システムの検討」環境共生研究、第9号、環境共生研究所、63～75頁、2016年3月
- ②「環境政策と次世代自動車—CO2削減の観点から—」浜本光紹監修、獨協大学環境共生研究所編『環境学への誘い』創成社、291～313頁、2016年9月
- ④「フランス自動車メーカーにおけるCSR—我が国燃費規制への示唆—」日仏経営学会第67回全国大会、獨協大学にて、2016年5月14日
- ④「中小企業経営とリーダーシップ」地域ビジネススクール草加「草加商工会議所コラボ獨協大学」獨協大学にて、2017年2月4日
- ⑤埼玉県大規模小売店舗立地審議会委員
- ⑤日仏経営学会理事

鈴木 淳

- ②「二次割当型設備配置問題のための二次元交叉を利用した進化的解法」(共著)、『日本設備管理学会誌』第28巻2号、40～46頁、2016年8月
- ④「遺伝的アルゴリズムを用いた設備配置問題解法における二次元交叉操作の比較検討」、『平成27年度日本設備管理学会秋季研究発表大会論文集』111～114頁、2016年11月
- ⑤日本設備管理学会理事、編集委員会委員長

高松 和幸

- ①『市民社会とレジリエンス』創成社2016年2月
- ⑤平成28年度中山間「ふるさと支援隊」(埼玉県農林部)
- ⑤飯能市未来フォーラム講演(「自己分析とイノベーション」)
- ⑤八潮市市民大学講演(「地域力の活用」)

立田 ルミ

- ②立田ルミ・鈴木淳・堀江郁美・黄海湘,“大学の情報環境に合わせた商用コンテンツの利用と結果,CIEC,PCカンファレンス2016論文集,pp299-302(2016.8)

- ②立田ルミ,“Computer Science Curricula 2013と今後の情報学教育について”,情報学研究第6号,pp.75-79(2017.2)
- ②立田ルミ,“小学校におけるプログラミング教育の導入と問題点”,情報学研究第6号,pp.89-92(2017.2)
- ⑤科研費共同研究者:“大学における一般情報教育のプレースメントテスト構築に関する研究”,課題番号25350210(今年度より調査研究開始で3年間)
- ⑤シンポジウムパネリスト、情報学研究所シンポジウム
- ⑤情報処理学会コンピュータと教育研究会座長
- ⑤CIEC研究委員会 海外調査研究:Learning Commonsと大学の図書デジタル化についての調査研究, New York, New York Public Library, New York University, The City College of New York, 2016年10月30日から11月4日まで(のちに調査報告書作成予定)
- ⑤情報処理学会コンピュータと教育研究会運営委員
- ⑤情報処理学会一般情報教育委員会委員
- ⑤CIEC研究委員会委員
- ⑤CEIC2016春季研究会論文編集委員

平井 岳哉

- ②2016年7月 「三菱鉱業の石炭事業終息過程における雇用問題と三菱グループ」獨協大学経済学部『獨協経済』第98号、P109～124
- ②2016年12月 「高度経済成長期における三井物産の汎用合成樹脂の販売」獨協大学経済学部『獨協経済』第99号、P31～51
- ③2017年1月 「経営史に学ぶ—経営史からみた企業統治—」一般財団法人企業経営研究所『企業経営』第137号、P22～25
- ⑤2017年3月 NPO法人マネジメント共有ネットワーク・創発倶楽部共済「経営寺子屋」講演

国際環境経済学科



大床 太郎

- ②吉田謙太郎・井元智子・栢植隆宏・大床太郎(2016)「環境評価研究の動向と今後の展開」『環境経済・政策研究』Vol.9, No.1, pp.38-50.(2016.3)
- ④Taro Ohdoko, “Reexamination of the Checkbox Positioning Effect in Choice Experiments: Evidence from a Survey of Japanese Undergraduates on Food Containing Euglena.” The Sixth Congress of the East Asian Association of Environmental and Resource Economics (EAAERE). (Kyushu Sangyo University, Fukuoka, Japan) (2016.8)
- ④大床太郎, 工藤恵美加, 石田真夕, “フェアトレード・コーヒーの選択実験に関するパイロットスタディ: 学生サンプルを用いた一般化多項ロジックアプローチ”, 環境経済・政策学会2016年大会, 青山学院大学(2016.9)
- ④大床太郎, “ナッジの「見方」”, 2016年度獨協大学情報学研究所シンポジウム「データサイエンス+行動科学—健康で安全な社会に向かうには—」, パネルディスカッション報告, 獨協大学(2016.11)

木原 隆司

- ①「金融構造と経済成長—東南アジアの証券市場育成支援は正しい方向か—」公益財団法人日本証券経済研究所 アジア資本市場研究会編(主査川村雄介)『アジアのフロンティア諸国と経済・金融』第1章、2017年3月
- ④"Empirical Analyses of National Size" 熊本学園大学経済学会講演会報告、2016年2月
- ④「金融構造と経済成長—実証結果と東アジアの実態—」日本証券経済研究所・アジア資本市場研究会報告、2016年6月
- ④「金融構造と経済成長—東南アジアの証券市場育成支援は正しい方向か—」2016年度日本応用経済学会秋季大会報告、2016年11月
- ⑤財務省財務総合政策研究所・上席客員研究員
- ⑤独立行政法人経済産業研究所・コンサルティング・フェロー
- ⑤日本応用経済学会理事

高畑 純一郎

- ②「公債の課税平準化機能:不確実性のないLucas-Stokeyモデルによる考察」(小林航氏との共著)『千葉商大論叢』第54巻第1号、2016年9月
- ④「公債の課税平準化機能:Lucas-Stokeyモデルにおける生産性の変化」、日本財政学会第73回大会、2016年10月

樋田 勉

- ②「消費者物価の変動要因」、『統計』、第67巻9号、pp.48-51. 2016年9月、日本統計協会。
- ③『統計でみる日本 2017』(日本統計協会 編)、第6章「物価・地価」、pp.54-67. 2017年1月、日本統計協会。
- ⑤総務省統計局物価指数研究会委員
- ⑤総務省統計研修所客員研究員
- ⑤厚生労働省社会保障審議会統計分科会委員
- ⑤厚生労働省厚生労働統計の整備に関する検討会委員
- ⑤草加市地域経営委員会委員
- ⑤三菱総合研究所中小企業実態基本調査における結果検証等に係る研究会委員・座長

中西 貴行

- ① Vocabulary for Languages and Linguistics. 学問別 重要英単語シリーズ (共著)南雲堂
- ① Vocabulary for Law. 学問別 重要英単語シリーズ (共著)南雲堂
- ① Vocabulary for Economics, Management, and International business. 学問別 重要英単語シリーズ (共著)南雲堂
- ② Nakanishi, T. (2016). Meta-analysis. JLTA (Japan Language Testing Association) Journal, 19 supplementary: 20th Anniversary Special Issue. 240-243
- ④ Collaborative learning with American exchange students. 11th Annual CamTESOL conference, Feb 23, 2016, Cambodia. (共同発表)
- ④「メタ言語知識の涵養による英語の受動・使役文教授法への一提案」。語学教育エキスポ 2016年3月6日 早稲田大学 (共同発表)
- ④ Explicit Crosslinguistic Grammar Instruction on Passive and Have-causative. JACET 55th International Convention. 2016年9月1日 北星学園大学 (共同発表)

- ⑤「英語教育研究からの示唆と英語多読の活用」。文教大学大学院 付属言語文化研究所 英語教育夏期講座担当 2016年8月5日
- ⑤日本言語テスト学会役員

中村 健治

- ① 第1章 地球環境と人間、環境学への誘い、浜本光紹監修、獨協大学環境共生研究所編、11-28、2016年9月、11-29
- ② GTK+によるインタラクティブなデータ解析ソフトウェアの開発、情報学研究、第6号、2016年1月
- ② 太陽エネルギーの利用効率からみた太陽光発電、風力発電、水力発電の比較、環境共生研究、第10号、2016年3月
- ② Overview of the end-of-mission experiment of precipitation radar onboard the Tropical Rainfall Measuring Mission satellite. IEEE Trans. Geosci. Remote Sens., 54 (6), 3450-3459. (共著)
- ④ Validation of GPM Ka-Radar Algorithm Using a Ground-based Ka-Radar System Vienna, April. (共同報告)、European Geosciences Union Annual General Assembly 2016, 2016年4月(ウィーン)
- ⑤ 宇宙航空研究開発機構客員研究員

浜本 光紹

- ①『環境学への誘い』創成社(監修および第13章執筆)
- ①『環境経済学入門講義 改訂版』創成社
- ②「米国二氧化硫黄排出許可証取引から何を学ぶか」『環境共生研究』第10号
- ③「書評 伊藤康著『環境政策とイノベーション——高度成長期日本の硫酸化物対策の事例研究』」『環境経済・政策研究』第9巻第2号
- ⑤ 埼玉県東南部地域5市1町緑と農の地域資源活用検討会 (7/25・10/17・12/21)

藤山 英樹

- ④"Study Conversation, Study Advice, and Goods Borrowing Networks in a Japanese University Class" 2016年4月, Sunbelt XXXVI, International Network for Social Network Analysis, New Port Beach, CA, USA
- ④"Co-evolution of Conversation and Advice Networks in a Japanese University Student Class" 2016年6月, 日本経済学会 春季大会, 名古屋大学
- ④"Statistical Analysis of Social Networks" 2016年8月, 経済統計学会 全国研究大会, 鹿児島大学

ネットワーク経済編集委員長 経済学部経営学科教授 有吉 秀樹

皆さん、獨協大学の校歌は歌えますか？お恥ずかしい話ですが、私は3番まである母校の校歌を長らく歌えませんでした。学部時代の4年間、その後銀行員生活を挟んで大学院に戻ってから5年間、さらに助手として半年間、足掛け9年半も通ったのですが…。歌う機会がなかったのかというと、そうではありません。事あるごとにそのような場面に遭遇した記憶はあります。要は覚える気がなかったのです。

しかし、不思議なもので、世に出て様々な経験を重ねてゆく中で、母校で培ったことが今の私を形作る大きな要素を占めていることがわかってきました。在学生の皆さんの中には、今の生活に意義を見出せていない人もいるかもしれません。でも、振り返れば、すべて自分の通ってきた道となるのです。

経済学部での学びや出会いを誇りに思っほしい、そのような思いから本誌は学生目線のコンテンツを大幅に増やすように工夫しました。これまでのプレゼンテーションコンテストの詳細やゼミ活動報告に加え、新たに「経済学部生の辿った道～これまで、今、そしてこれから」を企画したのもその一環です。先輩同輩の熱い思いや悩みが時空を超えて読者の皆さんの心に刺さり、校歌を高らかに歌い上げることのできる人が少しでも増えることを願ってやみません。



Network 経済 2017 Vol.31・32

年2回発行予定 ©獨協大学経済学部

編集・発行 獨協大学経済学部ネットワーク経済編集委員会
〒340-0042 埼玉県草加市学園町1丁目1

編集部 TEL 048(946)1929 FAX 048(943)3153
E-mail deaneco@stf.dokkyo.ac.jp

企画デザイン・印刷 望月印刷株式会社

※本誌の内容を許可なく転載・放送することを禁じます。 2017年3月31日

Published by Faculty of Economics, Dokkyo University and Society of Dokkyo Economics
Supported by Mochizuki Printing Co.,Ltd.